

松本市島内遺跡群

北方遺跡・南中遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1985・3

長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会



昭和59年度北方遺跡発掘調査地全景

昭和59年9月27日撮影

序

この遺跡は昭和58年度に着工しました県営は場整備事業島内地区にあり、当初から埋蔵文化財の存在が確認されている遺跡であります。昨年に引き続き本年度も区画整理工事の着手にあたり、県、市教育委員会の皆様と事前打ち合せにより調査方法、調査時期、費用負担等再三御検討をいただき、発掘調査による記録保存の方針を決定しました。

調査の実施は松本市教育委員会に全面的に委託を受けていただくことになりました。その結果平安時代の小規模集落跡、土器、陶器等の出土品が発掘され、島内地区の歴史を探るうえで貴重な資料となることと思います。

このように発掘調査が計画どおり完了できますことは、県、市教育委員会の適切な御指導とお忙しい中、調査団に参画され、発掘調査にあられた皆様の御尽力のたまものと感謝しております。

なお遺跡発掘にあたり7月より支障なく調査が行われましたことは、島内土地改良区の役員、地元関係者の御協力と御理解によるものであり、心より謝意の意を表します。

昭和60年3月

長野県中信土地改良事務所長 丸山仁志

序

島内地区は奈良井川と梓川に囲まれた地域に古くから集落が営まれており、遺跡の存在も地元の研究者によって以前より知られておりました。昨年に続き2度目の発掘調査が島内遺跡群の北方遺跡で実施されました。この調査は、同遺跡周辺で県営ほ場整備が行われることになったため、文化財保護の立場から記録保存を目的とする緊急発掘調査であり、中信土地改良事務所から当教育委員会に委託されて行われたものです。真夏2ヶ月調査が実施されましたがこの間地元の考古学研究者、島内史談会を中心とした地区のみなさまの協力をいただき、無事に終了することができました。調査の結果は、島内地区では初めての住居址が発見され、また同遺跡が西側へ広がっていることがわかり来年以降の調査が期待されます。このような遺跡の発掘調査が今後よりいっそう地区の歴史的な解明のために役立つことと思います。

今回の調査を通じてあるいは、調査結果をまとめた本書によって、文化財のたいせつさ、文化財保護の必要性を御理解いただければ幸甚に存じます。

最後に調査にあたりまして多大な御理解と御協力をいただきました島内土地改良区、全面的に御援助をいただきました島内史談会の皆様、島内公民館、島内出張所及び北方地区の皆様衷心より謝意を表して序といたします。

昭和60年3月

松本市教育委員会

教育長 中 島 俊 彦

例 言

1. 本書は昭和59年7月16日から8月30日に行われた島内遺跡群^{シマノウチ}北方遺跡^{キタノチ}及び10月16日から12月5日に行われた同南中遺跡^{ミナモト}の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査であり、松本市が長野県中信土地改良事務所から委託を受けて、松本市教育委員会が調査を行ったものである。
3. 本書の執筆は、第1章事務局、第1節太田守夫、第3章、2節「出土炭化物及び木片について」神沢昌二郎、第4章「結び」神沢昌二郎が行ないその他については熊谷康治が行なった。
4. 第4章の1部に田中正治郎氏より原稿をいただいた。記して感謝申し上げる。
5. 本書の編集は事務局が行ない、滝沢智恵子の助力を得た。
6. 本書の作成にあたり、作業の分担は次のとおりである。
土器の復元 滝沢智恵子 熊谷康治
土器の実測 山田真一 山下泰永 小口妙子 熊谷康治
鉄、石器の実測 小口妙子
遺構トレース 伊那史彦 熊谷康治
遺物トレース、図の整理、遺構写真 熊谷康治
7. 出土遺物の写真撮影は岩淵世紀氏にお願いした。
8. 本書で使用した遺跡の略語は次のとおりである。

SKK 北方遺跡

S…島内遺跡群 K…北方遺跡 K…釜海渡地籍

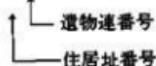
SMH 南中遺跡

S…島内遺跡群 M…南中遺跡 H…巾崎地籍

9. 出土土器の挿図及び本文中の遺物番号については次のとおりである。

百番代は出土住居址を示す。

〔例〕 1 1 1 — — — 第1号住居址出土11番



10. 出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 調査経過	
第1節 事業の経緯と文書記録	3
第2節 調査体制	4
第3節 調査地の位置	4
第4節 作業日誌	7
第2章 遺跡の環境	
第1節 遺跡の立地と地理的環境	11
第2節 周辺遺跡	16
第3章 調査の結果	
第1節 調査の概要	19
第2節 遺構と遺物	20
A 北方遺跡	
第1号住居址	20
第2号住居址	23
第3号住居址	24
第4号住居址	28
第5号住居址	29
第6号住居址	30
溝状遺構	33
土壇・ピット	33
出土炭化物及び木片について	39
B 南中遺跡	47
第4章 調査のまとめ	
調査所見	55
松本市内出土の灰釉陶器	57
結 び	59

挿 図 目 次

第1図 島内遺跡群分布図・遺跡位置図… 5	第16図 SKK溝状遺構(1), (2)……………32
第2図 SKK発掘調査地区の範囲…………… 6	第17図 SKK土壌・ビット群(1)……………35
第3図 SKK地層断面図……………12	第18図 SKK土壌・ビット群(2)……………36
第4図 SMH地層断面図……………14	第19図 SKK土壌(1)……………37
第5図 周辺遺跡……………15	第20図 SKK土壌(2)……………38
第6図 SKK調査地区全体図……………17	第21図 SMH調査地区全体図……………46
第7図 SKK第1号住居址(1)……………20	第22図 SMH溝・土層断面……………48
第8図 SKK第1号住居址(2)……………21	第23図 SKK第1住出土土器(1)……………49
第9図 SKK第2号住居址(1), (2)……………22	第24図 SKK第1住出土土器(2)……………50
第10図 SKK第3号住居址(1)……………24	第25図 SKK第2住出土土器……………50
第11図 SKK第3号住居址(2)……………25	第26図 SKK第2～4住出土土器……………52
第12図 SKK第4号住居址(1)……………26	第27図 SKK第4・5住・土壌 SMH出土土器……………53
第13図 SKK第4号住居址(2)……………27	第28図 SKK鉄・石製品……………54
第14図 SKK第5号住居址……………29	第29図 松本市内出土の灰釉陶器……………58
第15図 SKK第6号住居址……………31	
図 版……………61	

第1章 調査経過

第1節 事業の経緯と文書記録

- 昭和58年8月12日 埋蔵文化財保護協議を現地にて実施。出席者は県教委文化課郷道指導主事・中信土地改良事務所花岡主事外4名、地元研究者大久保知巳、市教委神沢。
- 昭和59年1月17日 昭和59年度補助事業計画書提出。
- 1月17日 昭和59年度埋蔵文化財発掘調査打合せ会議実施。調査実施時期等について打合わせ。出席者、中土改花岡主事外3名、市教委神沢外4名。
- 4月25日 昭和59年度埋蔵文化財発掘調査打合せ会議実施。調査について細部の打合せ。出席者、中土改花岡主事外3名、市教委神沢外4名。
- 4月25日 昭和59年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。
- 4月25日 昭和59年度県営ほ場整備事業島内地区島内遺跡群埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 5月1日 昭和59年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 5月21日 昭和59年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 6月30日 島内遺跡群埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 7月6日 昭和59年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 7月19日 昭和59年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 10月1日 昭和59年度県営ほ場整備事業に伴う島内遺跡群発掘調査委託契約の変更。
- 昭和60年1月8日 島内遺跡群埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。
- 2月18日 島内遺跡群埋蔵物の文化財認定通知。
- 2月19日 文化財保護事業執行状況調査。調査者は県教委文化課太田喜幸指導主事。

第2節 調査体制

団長：中島俊彦（教育長） 担当者：神沢昌二郎

調査員：吉田浩明，大久保知己，西沢寿晃，三村肇，横田作重，太田守夫，森義直

調査員補助：伊那史彦，小口妙子

発掘作業協力者：有賀一猛，飯島潔，宇留賀久雄，大出六郎，上條大四郎，栗田金一郎，栗田甚左エ門，胡桃沢勇十，瀬川長広，高山庄司，滝沢智恵子，中村文一，堀内一夫，堀内定一，堀内福一，牧垣源勝，丸山岩保，丸山久幸，三沢元太郎，三沢芳都，矢島正茂（五十音順）

整理作業協力者：宇留賀恭子，小岩井佳恵，柴田尚子，滝沢智恵子，向山かほる，山下泰永，山田真一

事務局：平林竹夫（社会教育課長）・神沢昌二郎（文化係長）・熊谷康治（主事）・直井雅尚（主事）・高桑俊雄（嘱託）・原克江

第3節 調査地の位置

今回の調査は島内地区を包括する島内遺跡群内の北側に位置する北方遺跡と，南側に位置する南中遺跡の一部を調査した。北方遺跡の今回の調査地区は，中央道長野線予定地に隣接する東側で北方の集落を西側へ抜出した水田内へ設定した。同地区は釜海渡と呼ばれ南西側から延びる微高地の東端に位置する。釜海渡地帯内の中央道長野線予定地内から土師器の出土が地元研究者により確認されており，それに隣接する同地区に調査地区を設定した。

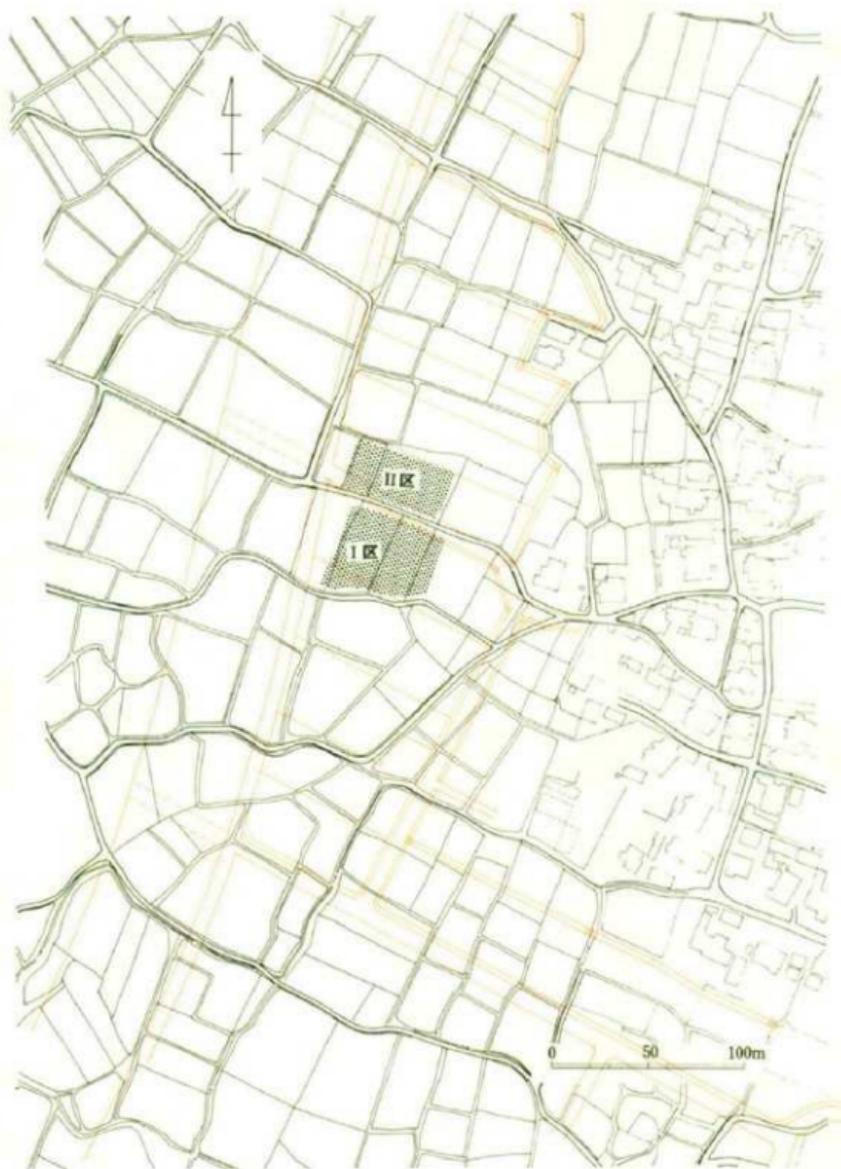
調査地区は農道を挟んでI地区とII地区に分れる。調査面積はI地区で1,500m²，II地区で1,400m²合計2,900m²である。具体的な調査地区の範囲は，I・II地区とも四隅から調査地区東側にある宇留賀末子氏宅の南西角とを計測した。

I地区			II地区		
北東隅	N116°E	51.5m	北東隅	N145°E	70.5m
南東隅	N85°5'E	56m	南東隅	N124°5'E	61m
南西隅	N89°5'E	110.5m	南西隅	N116°5'E	111.5m
北西隅	N112°E	102m	北西隅	N125°E	118m



1 : 15,000

第1図 島内遺跡群分布図・位置図



第2図 SKK発掘調査地区の範囲

第4節 作業日誌

北方遺跡

○7月16日(雨) I地区の東側をバックホーにより掘土する。
II地区を作業員により検出する。午後より御応用地質調査事務所
で、電探を実施する。場所は、I地区西側。

調査員・調査員補助：伊部史彦

作業員：中村文一、有賀一雄、宇留賀久雄、胡桃沢勇十、
飯島潔、矢島正茂、牧垣源勝、上條大四郎、高山庄司、堀内
定一。市教委：神沢、熊谷

○7月17日(雨)すくもり I地区を検出する。電探継続する。

調査員・調査員補助：伊部史彦

作業員：栗田善左エ門、三沢芳都、丸山久幸、中村文一、
宇留賀久雄、胡桃沢勇十、飯島潔、矢島正茂、牧垣源勝、上
條大四郎、高山庄司、堀内定一、宇留賀恭子 市教委：神沢、
熊谷

○7月18日(雨) 雨のため作業中止

○7月19日(雨)すくもり II地区を再検出する。北側に住居
址と思われる落込みを確認。(3、4住) I地区西側を重機に
より掘土作業をする。午後よりI地区を検出し南側に住居址
と思われる落込みを確認。(1、2住)

作業員：中村文一、宇留賀久雄、矢島正茂、牧垣源勝、上
條大四郎、三沢芳都、栗田善左エ門、丸山岩保、宇留賀恭子 市
教委：熊谷

○7月20日(曇)のち雨 I地区の検出作業を継続する。1住
と2住を確認。雨のため3時40分ごろ作業を中止する。後は
資材、テント内の整理をする。I地区の重機による掘土作業
(東側)を継続する。本日で重機は終了。

作業員：中村文一、宇留賀久雄、胡桃沢勇十、矢島正茂、
高山庄司、堀内定一、栗田善左エ門、三沢芳都、栗田善左エ門、
堀内福一、宇留賀恭子、牧垣源勝 市教委：熊谷

○7月21日(出)くもりのち雨 I地区東はじの検出作業をする。
午後は雷雨のため作業を中止する。

作業員：中村文一、宇留賀久雄、胡桃沢勇十、飯島潔、栗
田善左エ門、三沢芳都、堀内福一、宇留賀恭子
市教委：熊谷

○7月23日(雨) 21日の雨で流れた遺構の再検出をする。

(I、II地区) I地区西側を検出し、6住を確認、南西側に
多数の落込みを確認する。また溝1を確認する。

作業員：宇留賀久雄、牧垣源勝、上條大四郎、高山庄司、

栗田善左エ門、三沢芳都、栗田善左エ門、堀内福一、宇留賀恭
子 市教委：熊谷

○7月24日(雨) I地区東側の水がひけたので再検出をし、
5住、溝2を確認する。

作業員：中村文一、宇留賀久雄、矢島正茂、牧垣源勝、高
山庄司、三沢芳都、栗田善左エ門、堀内福一、宇留賀恭子、栗
田善左エ門 市教委：熊谷

○7月25日(雨) 溝1、溝2の一部掘下げを開始し、終了す
る。5住の再検出をする。1住の掘下げを開始し(再検出
後)、土壌10を確認する。

作業員：中村文一、宇留賀久雄、矢島正茂、牧垣源勝、栗
田善左エ門、三沢芳都、栗田善左エ門、堀内福一、宇留賀恭子
市教委：熊谷

○7月26日(雨)すくもり 1住の掘り下げを継続し、2住・
6住の掘り下げを開始する。

作業員：中村文一、宇留賀久雄、飯島潔、矢島正茂、牧垣
源勝、高山庄司、三沢芳都、栗田善左エ門、丸山岩保、堀内福
一、宇留賀恭子、栗田善左エ門 市教委：熊谷

○7月27日(曇) 1、2、6住の掘り下げを継続する。土壌
10の掘り下げを開始し溝1ベルトを残して全面掘下げをする。

作業員：中村文一、宇留賀久雄、飯島潔、矢島正茂、牧垣
源勝、高山庄司、栗田善左エ門、三沢芳都、栗田善左エ門、丸
山岩保、堀内福一、宇留賀恭子
市教委：熊谷

○7月28日(雨) 溝1、土壌10の掘下げを継続する。

調査員・調査員補助：大久保知巳

作業員：中村文一、宇留賀久雄、矢島正茂、牧垣源勝、高
山庄司、栗田善左エ門、三沢芳都、丸山岩保、堀内福一、宇
留賀恭子

市教委：熊谷

○7月30日(雨) 3住、土壌1・2・3・5の掘下げをする。
また溝1の掘下げを継続する。4住のプラン確認のため十字
にサブレを入れる。

調査員・調査員補助：横田作直、三村肇、大久保知巳、伊
部史彦

作業員：中村文一、宇留賀久雄、飯島潔、牧垣源勝、高山
庄司、栗田善左エ門、三沢芳都、栗田善左エ門、丸山岩保、堀
内福一、宇留賀恭子、矢島正茂 市教委：神沢

○7月31日休噴 溝2ベルト残して掘下げをし、土壌4、6、7の掘下げをする。4住のサブトレを継続する。

調査員・調査員補助：伊那史彦

作業員：中村文一、飯島深、矢島正茂、牧垣源勝、高山庄司、栗田善左エ門、三沢芳都、堀内福一、宇留賀恭子

市教委：神沢

○8月1日休噴 土壌4・6・7、4住サブトレの掘下げを継続する。土壌8・9・11・12・13・14・16・18・19・20・21の掘下げをする(中割)。溝2のセクションを実施し、実測後ベルトをはずす。5住の再検出ができないため、壁際を多く残して一部掘下げをする。

調査員・調査員補助：山越正義、伊那史彦

作業員：中村文一、飯島深、矢島正茂、牧垣源勝、栗田善左エ門、栗田金一郎、堀内福一、宇留賀恭子

市教委：熊谷

○8月2日休噴 5住の掘下げを継続し、6住の掘下げを開始する。4住のプランを設定して掘下げを開始する。溝1のベルト断面を実施する。

調査員・調査員補助：山越正義、大久保知巳、伊那史彦

作業員：中村文一、宇留賀久雄、飯島深、矢島正茂、牧垣源勝、高山庄司、栗田善左エ門、宇留賀恭子

市教委：熊谷

○8月3日休噴 5住の掘下げを継続し、北西角石の掘り再検出する。土壌、ビット群の再検出をする。土壌2のベルトをはずし、土壌11・20の掘下げをする。6住のベルト断面を実測し終了後ベルトをはずして写真を撮る。7住の掘下げを開始する。

調査員・調査員補助：山越正義、伊那史彦

作業員：中村文一、宇留賀久雄、矢島正茂、牧垣源勝、高山庄司、栗田善左エ門、堀内福一、宇留賀恭子

市教委：熊谷

○8月4日出噴 5住の掘下げを継続する。ビット1より掘下げを開始する。7住は住居址にならず土壌27とした。

調査員・調査員補助：大久保知巳、伊那史彦

作業員：中村文一、飯島深、矢島正茂、牧垣源勝、栗田善左エ門、堀内福一、宇留賀恭子

市教委：熊谷

○8月6日休噴 ビットの掘下げを継続する。土壌の断面を実施する。

調査員・調査員補助：伊那史彦

作業員：中村文一、宇留賀久雄、矢島正茂、牧垣源勝、栗

田善左エ門、堀内福一、宇留賀恭子

市教委：熊谷

○8月7日休噴 1・2・3・5住のベルト断面、土壌3・4の断面を実測する。

調査員・調査員補助：伊那史彦

見学者：百瀬長秀氏

市教委：熊谷

○8月8日休噴 1・2・5住のベルトをはずす。ビットの掘下げを継続する。溝1の清掃をし、溝2北側を確認して掘下げをする。

調査員・調査員補助：三村盛、伊那史彦

作業員：中村文一、宇留賀久雄、矢島正茂、牧垣源勝、堀内定一、堀内福一、宇留賀恭子

市教委：熊谷

○8月9日休噴 ビットの掘下げを継続する。1・2・3・5住の遺物、石、出土状態の写真を取る。1住の平板実測をし、4住のベルト断面を実施する。

調査員・調査員補助：伊那史彦、山越正義

作業員：中村文一、矢島正茂、牧垣源勝、堀内定一、栗田善左エ門、堀内福一、宇留賀恭子

市教委：熊谷

○8月10日休噴 2住を平板で実測する。ビットの掘下げを継続する。4住のベルトをはずす。

調査員・調査員補助：大久保知巳、伊那史彦

作業員：中村文一、宇留賀久雄、飯島深、矢島正茂、牧垣源勝、堀内定一、栗田善左エ門、堀内福一、宇留賀恭子

市教委：熊谷

○8月11日出噴 3住・6住の平板実測をする。調査地区内の清掃をする。

作業員：中村文一、矢島正茂、牧垣源勝、堀内定一、栗田善左エ門、堀内福一、宇留賀恭子、栗田金一郎

市教委：熊谷

○8月17日休噴 3住・溝1の平板実測をする。

調査員・調査員補助：伊那史彦

作業員：宇留賀恭子

市教委：熊谷

○8月18日出噴 3住の石を出して清掃し、写真を撮る。溝1、土壌、ビットの平板実測をする。1住のカマド付近の石を実測する。

調査員・調査員補助：伊那史彦

作業員：牧垣源勝、栗田善左エ門、宇留賀恭子

- 市教委：熊谷
- 8月20日(伊晴) 土壌、ピットの平板実測を継続する。2住、5住の清掃をする。3住カマド断面実測と写真を撮る。
- 調査員・調査員補助：伊那史彦
作業員：栗田甚左エ門、牧垣源勝、宇賀賀恭子
市教委：熊谷
- 8月21日(伊晴) 土壌群の遺物を取り上げる。
- 調査員・調査員補助：伊那史彦
市教委：熊谷
- 8月22日(休雨) 雨のため作業中止。
- 8月23日(休晴) 5住の平板実測と4住の清掃をする。
- 調査員・調査員補助：伊那史彦、小口妙子
作業員：牧垣源勝、栗田甚左エ門
市教委：熊谷
- 8月24日(休晴) 土壌群、ピット群の平板実測をする。4住の平板実測をする。2・3・5・6住の写真撮影をする。
- 調査員・調査員補助：小口妙子
作業員：牧垣源勝、栗田甚左エ門
見学者：桐原健氏
市教委：熊谷
- 8月25日(休晴) 1住の遺物を取り上げ、平板実測をして清掃をする。午後現地説明会を行う。地元の方々、松島中、島内小生徒ら約50名が集まる。
- 調査員・調査員補助：小口妙子
作業員：牧垣源勝、栗田甚左エ門
市教委：熊谷
- 8月27日(雨くもり後雨) 1住の石を取り上げ床面を確認する。雨のため午後はテント内資材や遺物整理をする。
- 調査員・調査員補助：伊那史彦、小口妙子
市教委：熊谷
- 8月29日(伊晴) 調査地区全体の平板実測をする。遺構掘上げの全体写真を撮る。4住のカマドの実測を継続する。ピットの断面実測後掘上げ、3住の床面にトレンチを入れる。
- 調査員・調査員補助：伊那史彦、小口妙子
市教委：熊谷
- 8月30日(休晴) 1住のカマドを実測する(1/10)。4住の掘上げの写真を撮る。3住のトレンチ、床面の状態を写真に撮る。午前で作業を終了する。
- 調査員・調査員補助：伊那史彦、小口妙子
市教委：熊谷
南中遺跡
- 10月16日(伏晴) 調査地区内の1～5ヶ所を試掘する。
- 調査員：大久保知巳
市教委：熊谷
- 10月18日(雨くもり) 発掘資材を選び、テントを撤去する。重機により排土作業を行う。(藤沢組、一ノ瀬氏)
- 作業員：大出六郎、瀬川長広
市教委：熊谷、百瀬、直井
- 10月19日(雨くもり時々雨) 重機により排土作業を行う。
- 市教委：熊谷
- 10月20日(休雨) 雨のため作業中止。
- 10月22日(伊晴) I地区の検出作業を行う。II地区の排土作業を行う。
- 作業員：大出六郎、瀬川長広
市教委：熊谷
- 10月23日(伏晴) II地区の排土作業を午前中で終了。I地区の検出作業を継続し、II地区の検出作業を開始する。
- 調査員：大久保知巳
作業員：有賀一徳、大出六郎、堀内福一、矢島正茂、牧垣源勝、中村文一、瀬川長広、堀内一夫
市教委：熊谷
- 10月24日(休晴) 溝の範囲がわかりにくいので、I地区を再検出する。溝1・2、巾1mのトレンチをあげる。II地区の溝を再検出する。
- 作業員：大出六郎、堀内福一、矢島正茂、牧垣源勝、中村文一、瀬川長広、高山庄司、三沢元太郎、堀内一夫
市教委：熊谷
- 10月25日(雨くもり) I地区の溝にトレンチT1～4を設定し、掘下げを開始する。II地区の北西側を再検出し、溝を確認する。T7～10、T23、24を設定して掘下げを開始する。
- 作業員：堀内福一、矢島正茂、牧垣源勝、中村文一、堀内一夫
市教委：熊谷
- 10月26日(休晴) II地区のT7～10、23、24の掘下げを継続する。T18～22を設定して掘下げを開始する。
- 調査員：大久保知巳
作業員：堀内福一、矢島正茂、牧垣源勝、中村文一、瀬川長広、三沢元太郎、堀内一夫
市教委：熊谷
- 10月27日(休晴) T18～22の掘下げを継続し、T25の掘下げを開始する。
- 作業員：堀内福一、矢島正茂、牧垣源勝、中村文一、三沢

元太郎

市教委：熊谷

○10月29日(月)くもり T26・27、土壌1・2を掘り下げる。

作業員：大出六郎、堀内福一、矢島正茂、牧垣源勝、中村文一、瀬川長広、高山庄司、三沢元太郎

市教委：熊谷

○10月30日(火)晴のちくもり 調査地区端にG1-G7を設定してG1-G5の掘り下げを開始する。

作業員：堀内福一、牧垣源勝、中村文一、高山庄司

市教委：熊谷

○10月31日(水)晴 本日は作業中止。

○11月1日(木)くもり T、Gの断面を確認する。II地区のG6、G7の掘り下げを継続する。G7を掘り下げたところ溝が検出される。

調査員：大久保知巳

作業員：大出六郎、中村文一、堀内福一、牧垣源勝、三沢元太郎

市教委：熊谷

○11月5日(月)晴 II地区南東角に不整形落込みを確認する。5本のベルトを残して掘り下げ、土層を確認する。後ベルトをはずす。

作業員：瀬川長広、堀内福一、三沢元太郎

市教委：熊谷

○11月6日(火)晴 本日は作業中止。

○11月7日(水)晴 溝の交わる場所を再確認する。溝を断面により確認して範囲を石灰で線を引く。調査地区全体の清掃を

する。I地区のT1-7、II地区の10-27の遺物を図面に入れて取り上げる。本日で作業員は終了。

作業員：瀬川長広、大出六郎、堀内福一、三沢元太郎、堀内一夫

市教委：熊谷

○11月8日(木)晴 調査地区の全体写真を撮る。G1-6の断面写真撮影。T1-3、5、23の断面写真撮影を行う。

作業員：瀬川長広

市教委：熊谷

○11月21日(水)くもり G1-3の断面実測を行う。溝の断面から範囲を再確認する。本日は午前のみで作業終了。

市教委：熊谷

○11月22日(木)晴 I・II地区の平板実測を行う。作業は午後のみ行う。

作業員：亀沢智恵子

市教委：熊谷

○11月27日(水)くもり 溝のT・Gの断面実測を行う。

作業員：亀沢智恵子

市教委：神沢、熊谷

○11月29日(金)晴 断面図修正と断面観察を行う。

市教委：熊谷

○12月5日(木)晴 地形地質(土層)の確認作業を行う。

調査員：太田守夫

市教委：熊谷

(事務局)

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地と地理的環境

A 島内北方遺跡の立地と地理的環境 (第3図)

1 遺跡の位置と周辺の地形

島内北方遺跡は、松本市島内北方集落の西沿い、海拔580~585mに位置している。地形上は梓川扇状地はん濫原の末端に当り、現河床とは西方500mしか離れていない。しかし地形面は、500m中間に1m前後の段差があって、現河床やこれに続く地形面とは、形成期を異にしている。

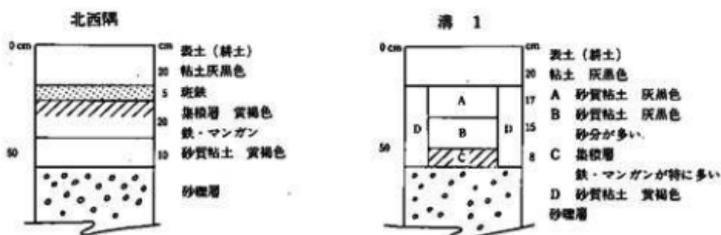
すなわち島内地区(旧島内村)は、樽木川分水口(倭橋付近)を頂点とし、北西を梓川の現河床(流れの方向 $N40^{\circ}E$ 、傾斜 $\frac{9.5}{1,000}$)、南南東を樽木川(せぎ、 $N70^{\circ}E$ 、 $\frac{8.8}{1,000}$)、東部を奈良井川の浸食段丘(ほぼN-S)によって囲まれた三角形の地域である。この地域は梓川扇状地のなかで、最も新しいはん濫原であるが、そのなかにも新旧数条の河床がみられる。すでに自然堤防状の高まりとなっているのは、高松から北の中央部で、古い水田地帯となっていて、北へ行くほど土層は深い。北中、北方間では1m以上の深さのところもみられる。もちろん、はん濫原の堆積物であるから、部分的には40cm以下の浅い土層が挟まっている。この自然堤防状の地域の周辺は、一般に15~20cmの土層で、それ以下は砂礫層になる。これを地形面の流れの方向や傾斜でみると、自然堤防状の地域は $N40\sim50^{\circ}E$ 、 $\frac{8}{1,000}$ 、周辺の地域は $N60\sim70^{\circ}E$ 、 $\frac{8.8}{1,000}$ 、現河床及びこれに続く面は $N40^{\circ}E$ 、 $\frac{9.5}{1,000}$ で明らかに堆積の状況がちがっている。

北方遺跡は、最も古いと考えられる自然堤防状の堆積の末端、西側寄りなのになっていることになる。

2 遺跡の堆積層と礫

遺跡の地形面は、南の北中から続く平たん面で $\frac{7.4}{1,000}$ と傾斜も緩くなっている。この平たん面はさらに東から北東へ延びているが、西から北西は、250mで1m前後の小段丘崖となり、現河床に属する地形面に続く。遺跡の周辺一帯はすべて水田域である。東筑摩郡松本市誌(自然編土壌)によると、土壌深度は40~60cm、土壌学的には壤土となっている。しかしはん濫原の地層の例にもれず、遺跡の調査範囲内でも、土壌深度の変化が激しい。(第3図)

一般に埋積層は上から、表土(耕土)15~20cm・灰黒色、鉄斑層5cm、鉄分マンガ集積層20cm・黄褐色、砂質粘土層10cm(+・黄褐色、砂礫層の順である。しかしII地区の南西隅や、I地区の西端のように、表土15~30cmでその下に砂礫層があらわれる一方、I・II地区の東隣の水田(池尻と



第3図 SKK地層断面図

よぶ)のように、土層の深さが1mを越えるところもある。集積層・砂質粘土層・砂礫層の鉄分・マンガンによる汚染は少ない。

両地区内には幅130cmの4条以上の砂礫層があって、N40°E(南西～北東)の方向を示している。この砂礫層の間は、一般に土層が深くなっている。N40°Eの方向は自然堤防状の地形面の方向と一致するので、恐らく当時の流れの方向と考えられる。

砂礫層にある礫は、いずれも梓川系統のもので、礫種は硬砂岩を主とし花こう岩・安山岩・チャート・礫岩・粘板岩・ホルンフェルス・ひん岩・けい石のすべて円礫である。硬砂岩や花こう岩・安山岩のなかには大礫が多いが、他には小礫か細礫が大多数である。

3 遺跡の立地

I地区には2条の溝があって、堆積層の流れと方向を明らかに異にしている。この関係を西側の溝でみると、次のようになっている。幅110～130cm、深さ40cm、左右の壁はほぼ直角で、褐色の砂質粘土からなっている。溝内の堆積は上からI砂質粘土層(灰色・厚さ17cm)、II砂質粘土層(やや灰黒色・砂分が多い・鉄分マンガンの汚染はない・厚さ15cm)、III鉄分・マンガンの集積層(汚染度が高い)の3層からなっている。集積層の下は礫層であった。またII層には炭の細片が含まれていた。炭の細片はI地区の北西隅にも発見されている。これらから考えられることは、溝が掘られてから、流れか滞水がありII層の堆積をみた。含まれていた炭は、住居跡の時代と関連があると考えれば、溝の掘られた時代が推定できる。III層は流れか滞水だった時の集積層で、I層は後に埋め立てられたものであることは、溝内部の堆積土と壁面の堆積土と色が違っていることからわかる。

遺跡と堆積層との前後関係は、住居跡や溝が堆積層に切りこんでいることから、堆積層の形成が遺跡の成立より先だったと考えられる。一般に新しいはん蓋原の堆積層の形成年代の推定は、むしろ考古学的発掘の資料に負うことが大きい。島内地区のはん蓋原の堆積も、奈良平安時代をあまりさかのぼらない時期とそれ以降とを推定するのが、現在の知識である。

B 島内南中遺跡の立地と地理的環境 (第4図)

1 遺跡の位置と周辺の地形

島内南中遺跡は、松本市島内南中、国鉄大糸線の南側沿い島内駅と島高松駅のほぼ中間、海拔585～590mに位置している。地形上は梓川扇状地はん氾原のなかの自然堤防状の高まりの上にある。

すなわち島内地区(旧島内村)は、榑木川分水口(榑橋付近)を頂点とし、北西を梓川の現河床(流れの方向N40°E、傾斜 $\frac{9.5}{1,000}$)、南南東を榑木川(せぎ、N70°E、 $\frac{8.8}{1,000}$)、東部を奈良井川の浸食段丘(ほぼN-S)によって囲まれた三角形の地域である。この地域は梓川扇状地のなかで、最も新しいはん氾原であるが、そのなかにも新旧数条の河床がみられる。すでに自然堤防状の高まりとなっているのは、高松から北の中央部で、古い水田地帯となっていて、北へ行くほど土層は深い。北中、北方面では1m以上の深さのところもみられる。もちろん、はん氾原の堆積物であるから、部分的には40cm以下の浅い土層が挟まっている。この自然堤防状の地域の周辺は、一般に15～20cmの土層で、それ以下は砂礫層になる。これを地形面の流れの方向や傾斜でみると、自然堤防状の地域はN40～50°E・ $\frac{8}{1,000}$ 、周辺の地域はN60～70°E・ $\frac{8.8}{1,000}$ 、現河床及びこれに続く面はN40°E・ $\frac{9.5}{1,000}$ で明らかに堆積の状況がちがっている。

南中遺跡は、最も古いと考えられる自然堤防状の堆積の南東側にのっている。

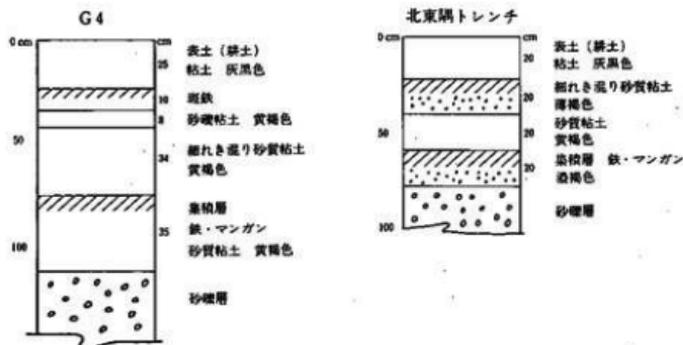
2 遺跡の堆積層と礫

遺跡の地形面は、高松から続く平たん面で $\frac{8}{1,000}$ の傾斜をもってさらに北東及び北へ延びている。遺跡の南東側は数メートルで1mの小段丘となり、下の地形面に続いている。段丘線はN60°E、高松集落の南にはじまり、集落の中央をぬけ、南中の変電所、小学校の西裏を通り東方の西方に至っている。明りょうな段丘崖で、遺跡の面と下の地形面との形成時期のちがいがわかる。遺跡の周辺一帯は水田域である。東筑摩郡松本市誌(自然編土壌)によると、土壌深土は遺跡の面が60cm(+), 下の地形面が20cm(-)で、土壌学的には壤土となっている。しかしはん氾原の地層の例にもれず、遺跡の調査の範囲でも土壌深度は変化が激しい。(第4図)

一般に堆積層は、上から表土(耕土・灰黒色・20～25cm)、斑鉄層・砂質粘土(黄褐色・20～30cm)、細礫混り砂質粘土(黄褐色・25～30cm)、鉄分マンガン集積層と砂質粘土(黄褐色・25～35cm)、砂礫層の順である。斑鉄層や集積層には盤層はない。土壌深度は60cmとされており、実際にも40cm以上であるから、水田耕作としては問題はない。

ただ地下構造としてみれば、耕土の下の土層は深淺さまざまである。すなわち深いところは表土面から1mをこえているし、浅いところは40～50cmである。

地下の砂礫層の状態からみると、トレンチ全体を通じ、およそ2条(最大幅4m前後)の砂礫層があり、N40°Eの方向を示している。この方向は遺跡の地形面と同方向を示しているので、北東



第4図 SMH地層断面図

流による堆積と考えられる。

特に土層の厚いところはNa1トレンチ(西)の北隅と南西隅, Na2トレンチ(東)の北西隅と北東隅である。厚い土層と砂礫層とはその接触部分からみて, 互に重なり合っているので, 余り時間的間けきのない堆積であろう。ただNa1トレンチ(西)の北西隅には, 砂・細礫・砂質粘土がうすく互層したり, 切りこみ合ったりしていて, 静水あるいは滞水性を思わせる部分があった。また地下の堆積で集積層が上下にみられた。上部は現在の水田の「しき」であるが, 下部はそれ以前のものである。下部のものは遺跡には関係する住居跡や溝がなかったが, 集積層の上に砂, 細礫混りの粘土層があることから, 自然流のものであろう。砂礫層にある礫はいずれも梓川系のもので礫種は硬砂岩を主とし花こう岩・安山岩・チャート・礫岩・粘板岩である。硬砂岩や花こう岩・チャートのなかには大礫が多いが他は小礫か細礫が大多数である。

3 遺跡の立地

すでに報告されている島内地区の平地の遺跡は, 島内遺跡群をはじめすべて自然堤防状の地形面についている。また発掘された遺跡の住居跡や溝等も, この地形面や堆積層を切って存在している。南中遺跡でも同様で, 堆積層の流れの方向と溝の方向とはちがっている。すなわちいずれも自然堤防状の地形面の形成後に遺跡の生活が始まり, その後浸食・堆積は受けていない。

この場合注目されるのは, 南中遺跡の南東を走る小段丘崖で, もし遺跡が浸食されていれば, 小段丘崖やその下の地形面は, 遺跡の成立時代より新しい形成となる。

島内地区の遺跡の分布は, 過去のはん濫流と深い関係をもっている。遺跡の分布だけでなく, 地形と遺跡の相互関係によっては, 時代決定や地形面の対比など重要なかぎとなる。今回の発掘ではそのような状態は発見できなかった。しかし段丘崖やその下の地形面は一回限りで形成されたものでないが, 相当新しいもののように推定される。

(太田守夫)



島内遺跡群

1. 高松遺跡
2. 南中遺跡
3. 北中遺跡
4. 北方遺跡
5. 上平瀬遺跡

6. 平瀬遺跡

7. 法住寺跡
8. 平瀬城館跡
9. 坂下(位坂)古墳群
10. 山田老根田遺跡

11. 田溝、山田古窯址群

12. 宮洲遺跡

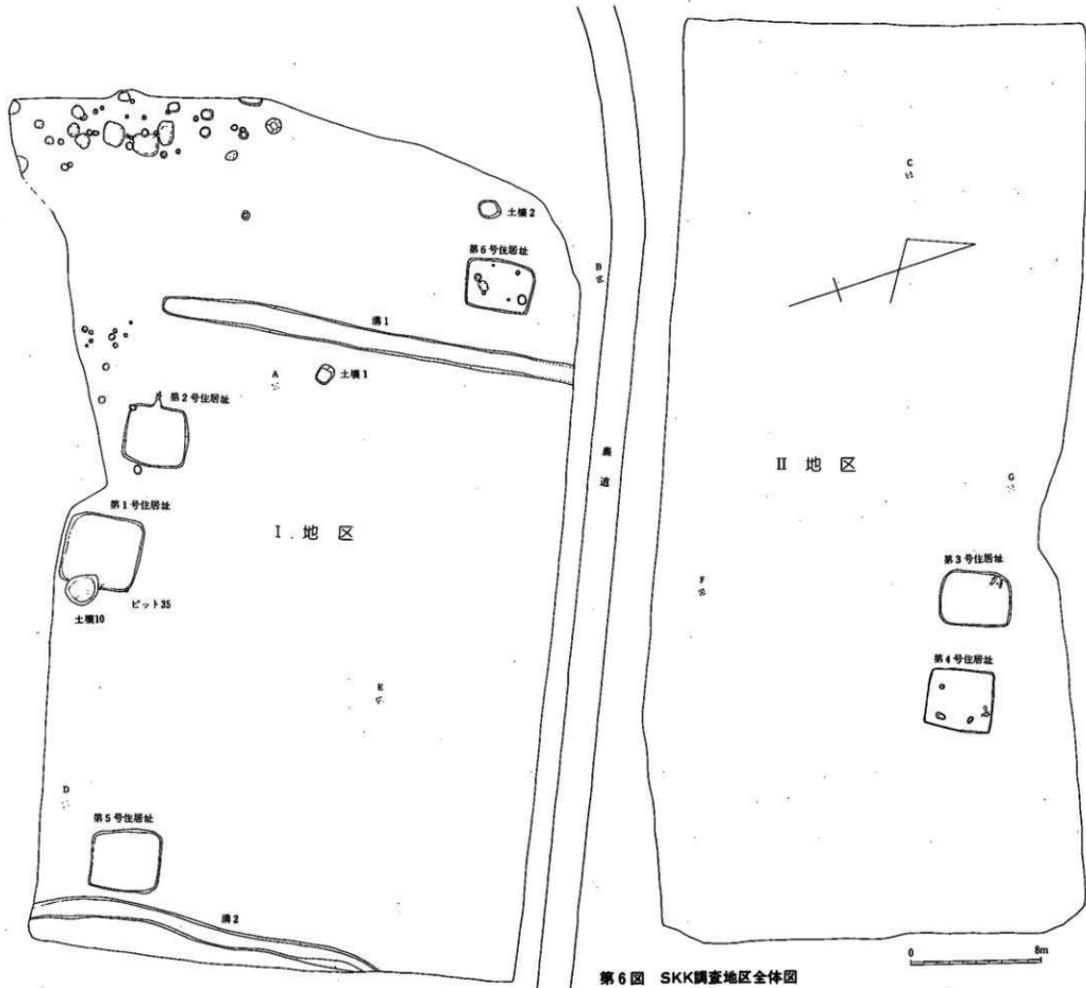
第5図 周辺遺跡

第2節 周辺遺跡 (第5回)

島内地区は松本市の北端に位置し、西側に梓川・東側に北流する奈良井川が三角地帯を形成し古来より水田地帯として知られる地域と、奈良井川右岸の城山山麓地域とに分かれる。以前より水田地帯に分布している遺跡を総括して島内遺跡群と呼ばれている。島内遺跡群内は梓川の流れの影響をたびたび受け、自然堤防状に残った上に遺跡が点在している。これらの遺跡の時代は、平安時代から中世以降でそれ以前の遺跡は現在のところ確認されていない。南から見ていくと高松遺跡は梓川にもっと近く、水田耕作中あるいは宅地造成中に土師器・須恵器・灰釉陶器・内耳土器・古銭等の出土を見ている。同じ段丘上を東へいくと、今回発掘調査を実施した南中遺跡がある。以前に土師器・須恵器・灰釉陶器や内耳土器をはじめ中世陶磁器が確認されている。南中遺跡の北側に北中遺跡があり同遺跡は昭和58年度に当市教委により発掘調査され、堂社の一部と見られる集石と墓址が確認されている⁽¹⁾。又、島内小学校敷地内からも土器類が出土したという記録もある⁽²⁾。調査地点の西側にある北中集落内の畑からも土器の出土が確認されている。今回調査された北方遺跡は北中遺跡の北側にある。以前から北方集落の西側に南西方向より延びる微高地上の水田から、耕作中又は床下げ時に土師器・須恵器・灰釉陶器の出土が確認されていた。次の上平瀬遺跡は島内遺跡群の北端に位置し同様の土器類が出土している。同遺跡群の北側に平瀬遺跡があり土師器・須恵器・灰釉陶器が出土している。又、同遺跡のある平瀬地区には平安時代の布目瓦を出土する法住寺跡や中世の城館跡の平瀬城館跡が知られている。奈良井川右岸の城山山麓地域へ移ると時代も多様になり遺跡の種類も多種になる。平瀬河東、鳥居山入口など山麓付近に縄文土器や石鉄の出土を見、泣坂といわれる岡田地区へ通じる古道付近の丘陵に平瀬坂下(泣坂)古墳群があり現在数基が確認されている。坂下(泣坂)古墳群の北側山腹に寺山遺跡があり、平安時代と見られる須恵器が出土している。山田地帯へ入ると老平、老根田、稲千原などの遺跡がある。老平からは平安時代の土師器・須恵器、老根田は縄文中期から後期のものと見られる土器・石鉄・打製石斧または有孔大珠、平安時代の須恵器・砥石、中世の鉄鏝など幅広い時代の遺物が確認されている。稲千原は当市では数少ない尖頭器を出土した所として知られており、他に打製石斧、磨製石斧など縄文時代の遺物が出土している。その他に山田地帯周辺から岡田地区一帯は古代に須恵器を生産した古窯址が数多く残っている。過去にその一部が調査⁽³⁾されたものの大部分は未調査のまま全容は不明で今後に期待される。

参考文献

- 藤沢宗平他「東京摩耶・松本市・塩尻市誌」第二巻、歴史上 東京摩耶・松本市・塩尻市出土資料編纂会 昭和48年
長野県史刊行会「長野県史 考古資料編」全一巻(1) 遺跡地名表 昭和56年
注(1)松本市教育委員会「松本市島内遺跡群 緊急発掘調査報告書」昭和59年3月
(2) 同上
(3)中島豊明 河西清光「松本市田澤古窯址の調査」『信濃』16-4



第6図 SKK調査地区全体図

第3章 調査の結果

第1節 調査の概要

北方遺跡 (SKK) (第6図)

北方遺跡は松本市大字島内に所在し、従来島内遺跡群として捉えられており遺跡群中北側に位置する。調査を実施するにあたって周辺を試掘したが南側は耕作面より約35~50cmで礫層が現われる。又、以前から調査地点より西側で水田の床下げのおりに土師器等の出土が知られており、今回の調査は遺跡の東辺を確認する意味で当該地に調査地を設定した。調査地は農道を挟んで2地区に分かれ南側をI地区、北側をII地区とした。調査面積はI地区1,500m²、II地区1,400m²、合計2,900m²である。以下地区別に概要を述べる。

I地区

遺構検出面は耕作面下30~75cmで東側が深い。出土遺構は住居址、溝状遺構、土壇及びピットであり内容は平安時代の竪穴式住居址3軒・中世の竪穴式住居址1軒・溝状遺構2本・土壇及びピット61基である。平安時代の住居址は地区内南側に有り、中世の住居址は北側より検出された。土壇及びピットはほとんど南西角と第2号住居址周辺より検出された。住居址の切合はなくすべて単独出土である。出土遺物は住居址内から灰釉陶器碗・皿・小瓶・土師器環・皿・甕等が出土している。土壇及びピット内の出土遺物は少量の土師器皿片・碗片・刀子と思われる鉄片等である。

II地区

II地区はI地区と農道を挟んで北側に位置する。この地区の遺構検出は耕作面下30~50cmの黄褐色土面で確認できたが非常に困難であった。北東側に平安時代の竪穴住居址が2軒のみであった。出土遺物は土師器皿・環・鈎釜片、石器では砥石等が出土した。

南中遺跡 (SMH) (第21図)

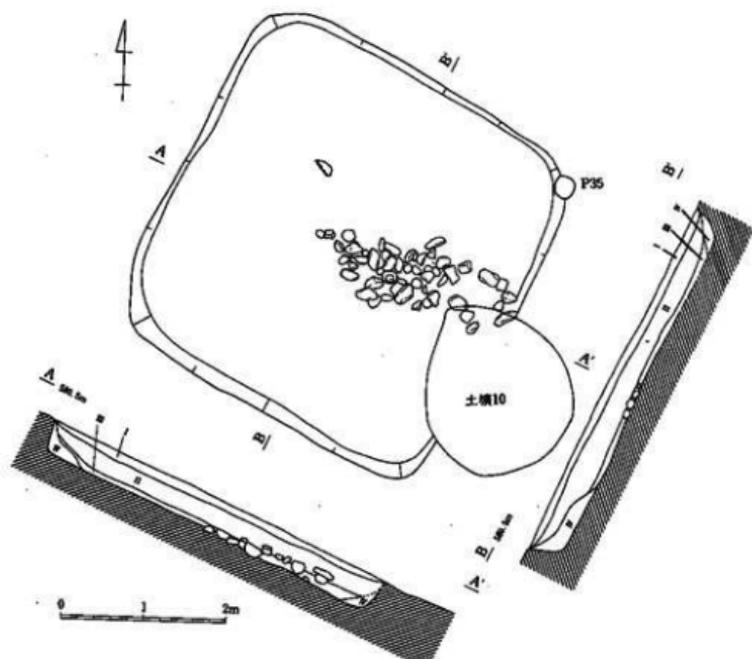
南中遺跡は島内遺跡群の南側にあり、古来に梓川の影響でできた自然堤防の段丘上に位置する。以前から調査地周辺では水田の床下げ及び耕作中に土師器、須恵器の出土が確認されていた。今回調査にあたり以前からの遺物の出土状況から調査地を設定した。調査面積は1,300m²で検出面の深さは耕作土下40~50cmの黄褐色土面である。検出された遺構は溝が9本、土壇状の落ち込み2基である。溝は範囲の確認が非常に困難であったため巾1mのトレンチをT1から32まで設定し、断面観察とあわせて行なった。遺物は須恵器環・土師器環・甕・灰釉陶器碗、中世陶磁器の破片が検出面で出土し、溝に伴うと思われる出土状態のものは数点のみであった。

第2節 遺構と遺物

A 北方遺跡 (SKK)

第1号住居址 (第7・8・23・24図)

遺構 I地区中央南端に位置する。東壁南側を土壌10に北東角をP35に切られる。平面形状は方形を呈し、主軸方向に4.4m他の方向に4.54m。残存する深さは34cmを測り広さは19.98m²と検出住居址中最も大きい。覆土は灰色土から灰褐色土で5層に分層され小礫が多く下層ほど砂質となる。壁はほぼ垂直に掘り込まれ下部の礫層をわずかに掘り込んでいる。状態はあまり良好ではなく明瞭な壁は確認されなかった。ただ床面付近は壁が礫層になるので確認できる。カマドは土壌10にほとんど壊されており全容を知りえない。北側の袖石がわずかに残存しており、構築材料は石及び若干の粘土を使用していると思われる。わずかに焼土が見られ煙道は確認されなかった。床面は北側の一

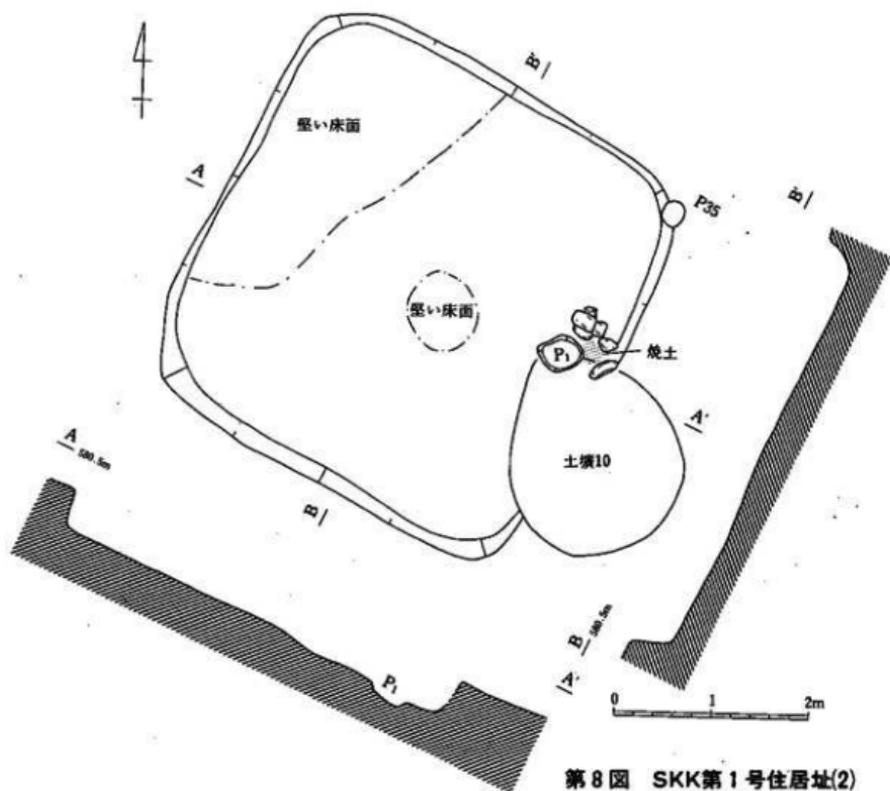


- I : 褐色土粒 (5-10mm) 混入灰褐色土
 II : 褐色土粒 (5-10mm)・赤褐色土粒 (3-5mm) 多量混入灰褐色土、やや砂質
 木炭化物 (5-10mm) 及び3-10cm大の礫を含む
 III : 赤褐色土粒 (10mm程度) 混入灰褐色土
 IV : 赤褐色土粒 (10-15mm) 多量混入灰褐色砂質土

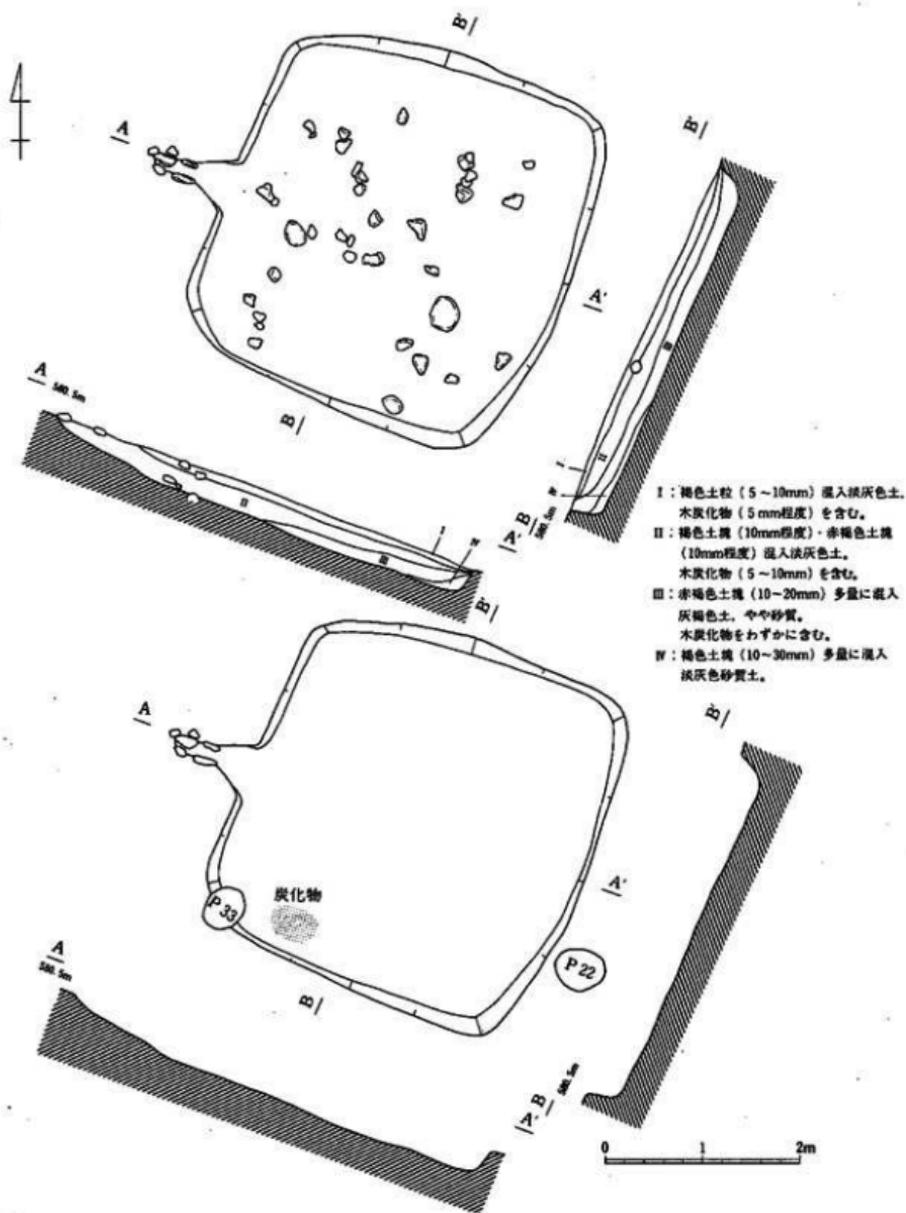
第7図 SKK第1号住居址(1)

部と、中央部に黄褐色の非常に堅い面が見られたが大半は砂利面となり軟弱である。また中央部が若干凹んでいる。カマド付近及び中央部にかけての床面から覆土中に5~30cm大の円礫が集石状に見られた。柱穴はなかった。ピットはカマドの前にP₁が確認された。50×40cmを測る不整形円形を呈し深さは10cmである。

遺物 出土状態は下層から床面にかけての出土が多い。一括出土は少なくほとんどが破片である。カマド内底部に土師器甕の破片が数個体分見られたが完形にはならなかった。種別は土師器・灰釉陶器・須恵器である。101~107は土師器環である。101は中央南端床面よりほぼ正位で出土した唯一の完形土器である。体部に比較して底部が小さく内湾しながら立ち上り口縁はやや外傾きみである。体部にはロクロ挽き痕が底部より渦巻き状に見られ底部は回転糸切り痕を中央部のみ残し周辺はヘラ削りされ、内面黒色処理されている。102も同様の内黒の環で、101よりやや深く全体に丸い。103は内面黒色処理されない。底部が小さく逆ハの字に開き軟質で全体に器面が荒れている。108~111



第8図 SKK第1号住居址(2)



第9図 SKK第2号住居址 (1, 上) (2, 下)

は灰釉陶器甕である。108は体部にやや丸みを持ち、口縁は丸く仕上げられている。高台外面に丸みをおびた稜をつくり、内面は外側へ直線的に開く。109・110は小破片である。外面体部はへら削り後ナデ調整されており、釉は淡緑色を呈し刷毛がけしている。111は体部下半ゆるやかな丸みを持ち、ほぼ直線的に開く。口縁は外側へ丸く曲げられている。体部外面はへら削り後ナデ調整され、器厚は均一に薄く仕上げられている。高台は外面に丸みをおびた稜を持ち内面は外側へ開く。釉は淡緑色を呈し刷毛がけである。112は灰釉陶器の皿である。他の甕よりやや器厚が厚い。内側の深さは2cmを測る。釉は淡緑色でつけがけである。他に灰釉陶器は119の短頸壺があるが小破片である。須恵器は118の蓋片のみで坏類はない。

第2号住居址 (第9・25・26・28図)

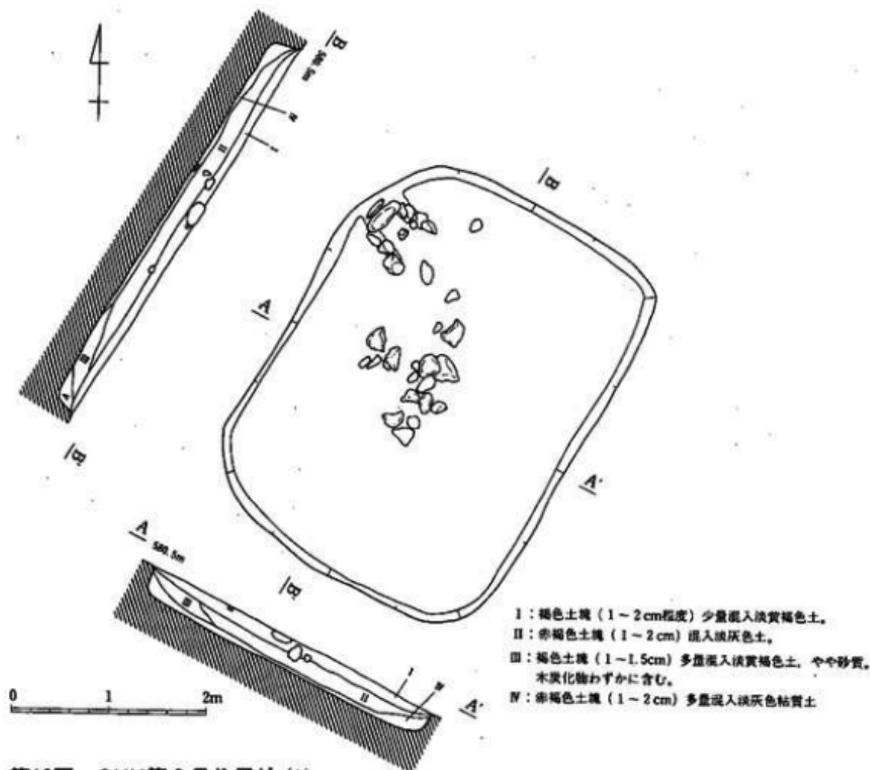
遺構 第1号住居址の西側に位置する。平面形状は方形を呈し、規模は主軸方向に3.6m他方向に3.86m、残存する深さは33cmを測る。主軸方向はN68°Wである。覆土は灰色土及び灰褐色土で5層に分層され、下層は砂質となる。各層に炭化物をわずかに含む。壁はやや傾斜を持ち状態はあまり良くなく明瞭な壁は確認されなかった。カマドは西壁中央に構築され、石材や粘土は確認できなかったが、やや壁外に張り出していて煙道を持ち煙道の出口に10～25cm大の円礫を使用している。カマド及び煙道内には焼土及び炭化物はあまり見られずわずかに焼土粒が確認されたのみである。床面は黄褐色土を呈する砂質土で軟弱であり堅い部分は確認できなかった。南西端に50×40cmぐらいの範囲に約10cmの厚さで炭化物が見られ、また覆土中から床面にかけて10～30cm大の円礫が見られた。これらの礫は住居址内全面に見られる。柱穴及びピットは確認されなかった。

遺物 上層と中層に多く出土した。一括及び完形の出土はなくほとんど破片である。種別は土師器・須恵器・灰釉陶器及び砥石・鉄片である。220～222は土師器坏である。220は内面に僅かに暗文が残り器厚は5mm前後でやや厚手である。222は内面へら磨きが施され黒色処理されている。外面体部は丁寧に仕上げ調整されている。器厚は5mm前後でやや厚手である。223～227は須恵器の坏である。須恵器の出土は少なく坏類は全て淡い灰白色を呈し非常に軟質である。また軟質であるため器面が荒れている。器形は似ていて底部は小さく逆ハの字状に開く。須恵器は他に長頸壺の口縁部破片236と蓋片235がある。酸化焰焼成状(褐色)を呈しやや軟質である。228～231は灰釉陶器の甕である。228・229は底部のみである。高台外面に稜を持つ。底部外面に墨書がある。228は下半分、229は上半分が欠けており判読できない。230は体部外面にへら削りで器厚を薄く均一に調整後ナデ調整されており、逆ハの字状に開く。口縁端部はやや外側に丸く曲げられているが成形はやや雑である。高台外側に丸みのある稜をもつ。釉は淡緑色を呈し、つけがけである。剥落していて残りは少ない。231は口縁部の破片でへら削り後ナデ調整されており、口縁は丸く外側へ曲げられている。釉は淡緑色を呈し刷毛がけしている。他に237の小瓶がある。半分ほどの破片で口縁と体部下半を欠く。釉は淡緑色を呈する。他に上面より砥石が1点出土している。

第3号住居址 (第10・11・26・28図)

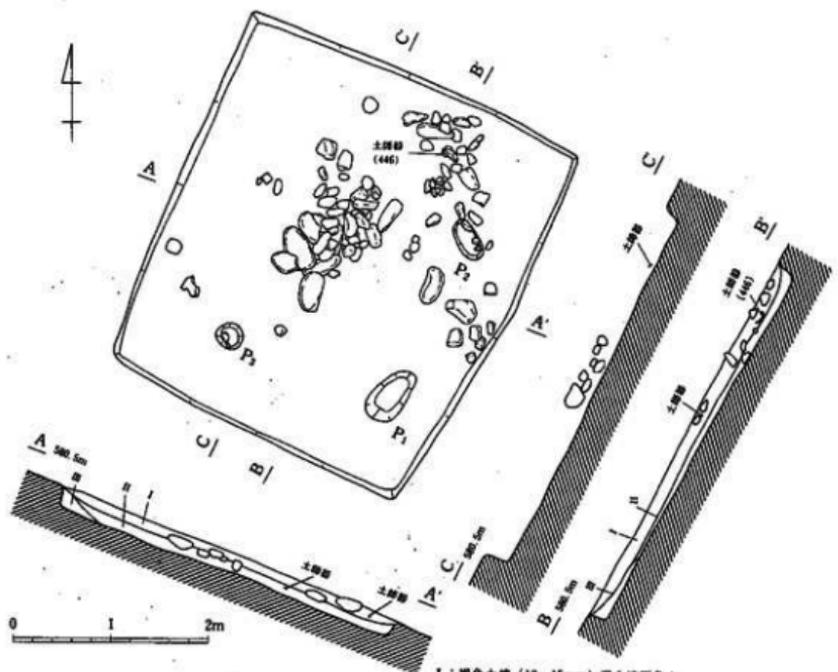
遺構 II地区北側、第4号住居址の西側に位置する。平面形状は隅丸の長方形を呈し、規模は北東に4.26m北西に3.26m、残存する深さは29cmを測る。主軸方向はN40°Wである。覆土は黄褐色土及び灰色土で5層に分層され下層は粘質である。第III層に炭化物をわずかに含む。壁はほぼ垂直に掘り込まれており状態はあまり良好ではなく明瞭な壁は確認されなかった。カマドは西壁北角寄にあり地山をわずかに残して掘下げ石と粘土を使用して構築されていて、八の字にやや開いており内に10cm大の石が置かれている。煙道は確認されなかった。床面は南側がやや高く礫面になっており中央部から西側は非常に堅い黄褐色土面で東側から北側にかけての床面は、黄褐色土が混る黒色土で非常に軟弱である。住居址中央部からカマド付近にかけての覆土中に15~30cm大の円礫が見られた。他の住居址と違い全ての石が床面から10~20cm程浮いている。柱穴・ピットは確認されなかった。

遺物 出土は少ない。ほとんど床面及び覆土下層からの出土で種別は土師器・須恵器でありほと



第10図 SKK第3号住居址(1)

んどが土師器である。また大型器種は須恵器の壺か甕片の1点のみである。土師器は坏、甗、皿片で大型器種の変類の出土は見られなかった。特に皿片が多く、図示したものは、338~340、345の4点である。338は底部に回転糸切痕があり、体部上半から口縁部にかけて横ナデで調整されておりこのため体部に丸い稜状の痕が残る。口縁はわずかに外反気味に開く。内面底部にロクロ成形時の痕が同心円状に残っている。胎土、焼成ともに良好である。底部が厚い。339は338に比較して、底部がやや大きく厚い。体部外面に黒色の付着物が見られる。内面底部に同心円状の痕は見られない。340は耳皿である。皿の両端を内側へ折り曲げただけの粗雑なものである。内面に凹凸がある。内外面に黒色の付着物があり、特に外面は胎土の色が確認できないくらいに付着物が多い。345も同様な皿であるが器形は外側にやや開いている。黒色の付着物がある。343、344は高台付の皿である。皿の部分欠く。343は胎土、焼成ともに良好で成形も丁寧である。高台は外側に膨らみをもち内側は外方へ開く。344は343に比較して高台が高く外側は外反するように開き内側は直線的に開く。胎土は砂粒を含みろい。器面が全体に荒れている。他に礫石が1点出土している。



第12図 SKK第4号住居址(1)

- I: 褐色土塊 (10~15mm) 混入灰褐色土、木炭化物 (5~10mm) をわずかに含む。
- II: 褐色土塊 (10mm程度)・赤褐色土塊 (10~15mm) 混入灰褐色土や中砂質。
- III: 赤褐色土塊 (10mm程度) 混入灰褐色土。

第4号住居址 (第12・13・26・27回)

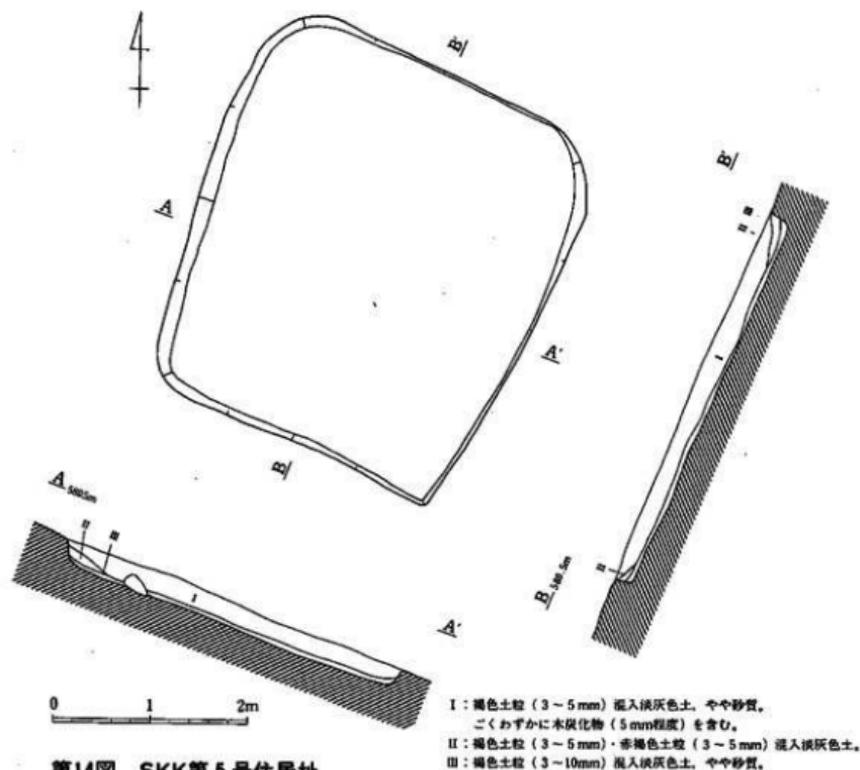
遺構 II地区北側、第3号住居址の東側に位置する。検出作業中より上面に石や遺物の出土が多く早くから住居址ではないかと思われていたが、範囲の確認が困難であったため南北、東西の2方向に幅50cmのサブトレンチをあげ床面と壁の立上りで確認をした。平面形状は方形を呈し主軸方向に4.04m東西方向に3.76m、残存の深さは26cmを測る。主軸方向はN28°Eである。覆土は灰色土及び灰褐色土でI層に炭化物をわずかに含む。壁はほぼ垂直に掘り込まれており状態はあまり良好ではない。カマドは北壁やや東寄りにあり石及び粘土で構築されていたと思われるが破壊されており石材の位置も原形をとどめていない。内部は焼土・炭化物が認められた。床面は黄褐色土で中央部から北側にかけて一部に非常に堅い面が確認された。住居址中央部からカマド及び東壁周辺の床面から覆土中に15～50cm大の円礫が多数見られた。特に中央部には集石状になっており礫も大きなものが多い。また床面直上ものは僅かではほとんどが2～5cmぐらい床面より高い位置にあった。柱穴は西側、南側、東側の3ヶ所で確認されたが北側は確認できなかった。P₁は60×40cmの楕円形を呈し深さは約20cmを測る。断面形は、段のある槽鉢状を呈する。P₂は南北に長く40×26cmの楕円形を呈し深さは約20cmを測る。断面形は半円形を呈する。P₃は径30cmの円形を呈し深さは約10cmで断面形は逆台形を呈する。

遺物 検出面で破片の出土が多い。覆土中は上層及び中層には少なく下層と床面の出土が多い。カマド内からはほぼ完形の土師器環(446)1点が出土した他は小破片がほとんどである。出土器種は土師器、灰釉陶器、須恵器で土師器は小器種片が多く甕片は少ない。鈔釜片が2点ほど出土した。須恵器は甕又は甕片の他に坏は灰白色を呈し非常に軟質の小破片が多い。灰釉陶器は破片が少なく大形器種片が出土している。446、450は土師器環である。446はほぼ完形の環である。全体に厚手で器厚は6mm前後である。内外面ともにロクロナデが施されており、外面体部に回転糸切時の糸痕が残る。胎土に砂粒及び小石が含まれる。外面底部から体部の一部にかけては黒色の付着物が多量に見られる。450は底部のみである。胎土は石英が多量に含まれる。器面はやや荒れている。448、449は土師器高台付皿で皿部を欠く。448は高台部分もほとんど欠く。胎土に砂粒を含み器面が荒れる。449は高台が外反きみに開く。胎土に砂粒を含み器面が荒れる。451は灰釉陶器の広口瓶底部である。外面体部は、ヘラ削りされておりやや丸みを持って立上る。外面底部は、粘土板を平にした痕があり、周辺は高台付の調整痕が見られる。釉は淡緑色を呈し外面体部及び底部は全面に刷毛がけされており、内面は底部の一部にたまり状の釉が見られる。

第5号住居址 (第14・27図)

遺構 I地区南東側の溝状遺構2の西側に位置する。平面形状は方形を呈し南北方向に4.1m東西方向に3.76mで残存する深さは19cmを測る。覆土は褐色土の混る灰色土で3層に分層される。覆土全体に小礫が混り砂質でありI層にごく僅か炭化物を含む。壁はほぼ垂直に掘り込まれており状態は良好ではない。床面は黄褐色土であるが、全体に軟弱であり堅い床面は確認できなかった。カマドも破壊されたのか確認できなかった。また南東角に僅かに炭化物が認められたがまとまりのある焼土の分布は認められなかった。柱穴・ピットは確認されなかった。

遺物 覆土上層及び中層からの出土が多い。種別は土師器、灰軸陶器、須恵器であり図示し得たものは3点のみであり、他は小破片であった。特に須恵器は壺又は甕の大形器種片で坯は灰白色を呈する非常に軟質の小破片のみである。完形及び一括出土はない。552は土師器碗で高台部分が欠落



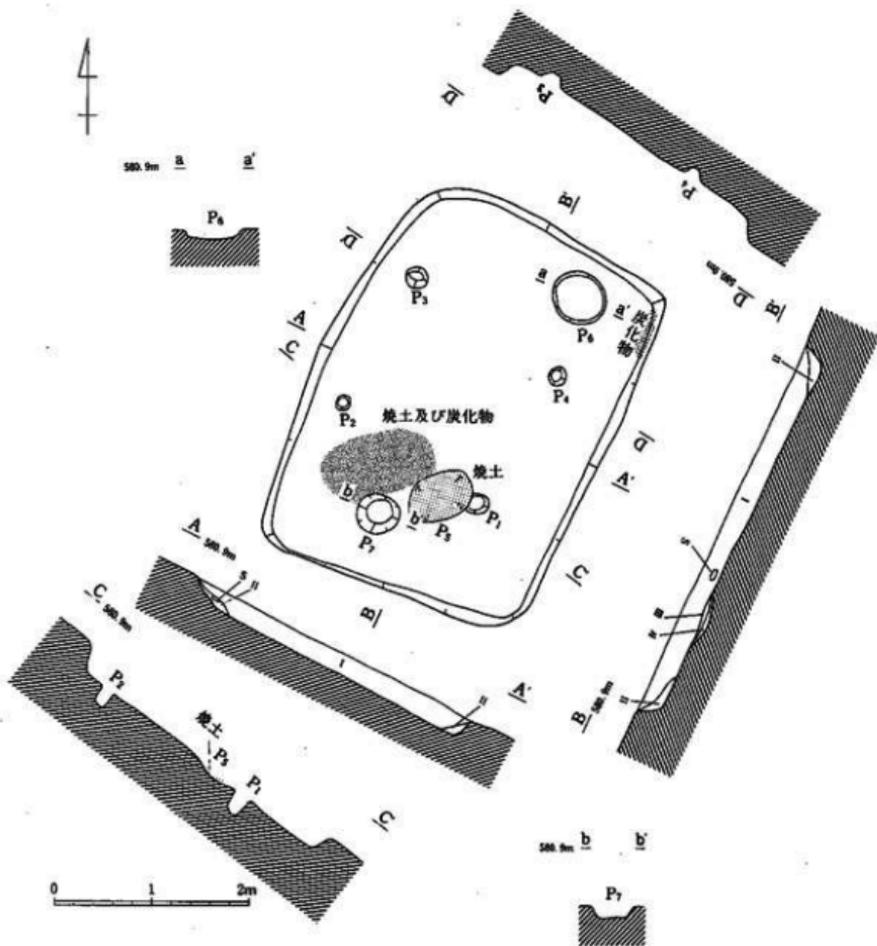
第14図 SKK第5号住居址

している。軟質で器面が荒れているが内面の調整は丁寧である。内面底部に黒色の付着物がある。口縁部付近は横ナデされている。554は土師器壺口縁部片である。外面口縁部は横ナデされ体部はハケ目、内部は口縁部から頸部にカキ目の調整が施されている。口縁は逆ハの字状に外側へ開く。553は灰釉陶器碗である。体部下半にゆるやかな丸みをもち逆ハの字状に開き、口縁は丸く外側へ曲げられている。器厚は薄くへう削りされた後、ナデ調整が施されている。高台は外側に丸みのある稜を持ち、内側は直線的に外方へ開く。外面底部に墨書があり上半分を欠く。肴、有、宥などがあてはまるかと思われる。釉は淡緑色を呈し外面及び体部下半まで、内面は底部付近まで丁寧に刷毛がけされている。

第6号住居址 (第15図)

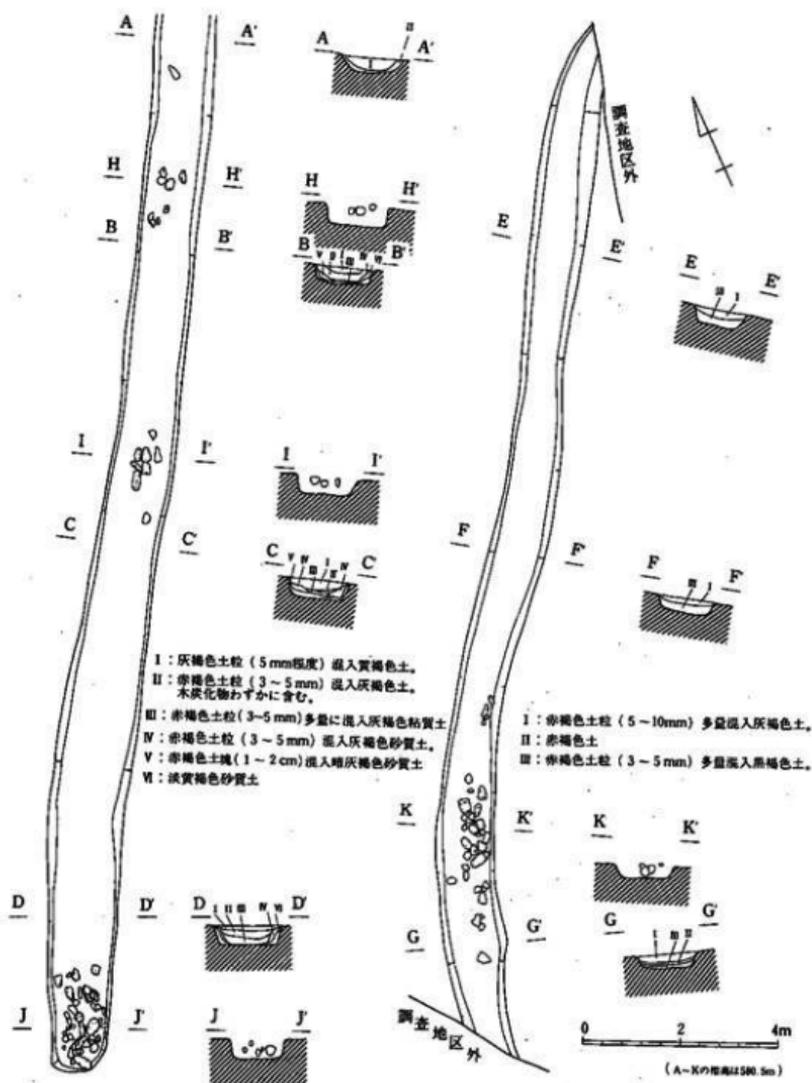
遺構 I地区北西角の溝状遺構1の西側に位置する。平面形状はやや隅丸の長方形を呈し南北方向に4.12m、東西方向に3.12m、広さは12.85m²、残存の深さは14cmを測る。覆土は灰褐色土と暗褐色土で2層に分層される。壁はほぼ垂直に掘り込まれており状態はあまり良好ではない。カマドはなく南寄りの中央やや東側に70×50cm、深さは約10cmを測る楕円形の掘り込みが確認された。内部は2層に分かれ、I層は灰褐色土で炭化物を僅かに含み、II層は赤褐色土で焼土層である。焼土層の厚さは約4cmである。床面は軟弱で淡黄褐色を呈する。南西側P₂とP₇の間に110×30cm程の焼土及び炭化物の範囲が認められた。厚さは5mmから1cm程度である。柱穴はP₁～P₄の4本が確認された。東西方向の間隔は1.7m、南北方向は1.5mを測る。平面形は円形で径15～25cmであり対角線上の北側と南側の柱穴がやや大きい。深さは10～20cm前後である。他にP₅とP₇がありP₅は50×60cmの楕円形を呈し、暗茶褐色の砂質で僅かに炭化物を含む。深さは7cm程である。P₇は径40cmの円形で炭化物をわずかに含む茶褐色を呈し砂質である。深さは10cm程である。

遺物 ほぼ中央部の床面から釘と思われる鉄製品と北東角の覆土中から青磁の小破片が出土しただけである。釘は残存する長さが13cmで3分しており先端部を欠く。断面は丸みのある方形を呈する。青磁片は図示し得ない。釉は白色に近い青色を呈し、厚さは0.2mm前後である。胎土はやや荒い。碗の高台部分で高台は欠けている。全体の厚さは3mm前後である。



- I : 赤褐色土粒 (5-10mm)・塊 (10-20mm) 混入灰褐色土。
 (木炭化物をわずかに含む)
- II : 灰褐色土塊 (10-20mm) 混入暗褐色土。
- III : 灰褐色土塊 (5-15mm) 混入黄褐色土。
 (木炭化物 (5-10mm) を含む)
- IV : 灰褐色土塊 (5-15mm) 混入赤褐色土 (焼土)

第15図 SKK第6号住居址



第16図 SKK溝状遺構 1(左), 2(右)

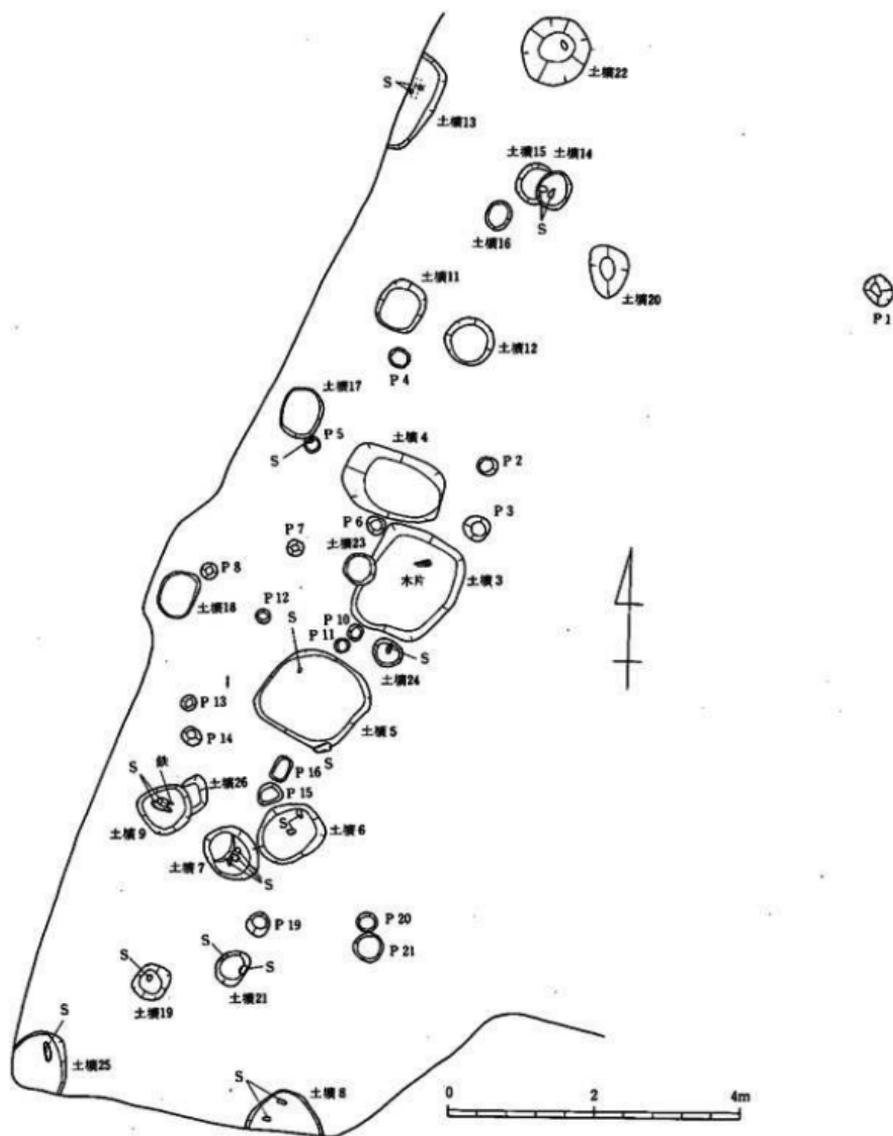
溝状遺構 (第16・28図)

Ⅰ地区より2本の溝が検出された。溝1は地区内西側に位置し北東方向から南西方向にかけて長さ25m・巾1.5m前後の直線で深さは30~40cm前後で南西側がやや深い。南西側は先端が丸くなって終っている。断面形は逆台形で覆土は灰褐色土から黄褐色土であり全体的に砂質である。3ヶ所に集石状の投込みが見られ南西端は10~40cm大の円礫が多くほとんどが底部から若干高い位置にあり3ヶ所中一番礫の数が多し。中央部は20~40cm大の円礫で数は少なく覆土上~中層に位置している。北東側は10~20cm大の円礫で割れ石が多く覆土上~中層に位置している。遺物は全て覆土中から出土し須恵器壺片・土師器坏底部片・刀子と思われる鉄片の3点のみで内、鉄片のみ図示した。出土状況は土師器片及び鉄片は北東側の礫の範囲内に、須恵片は南西端の礫内より出土した。溝2は地区内東端第5号住居址の東側に位置し、北東方向から南東方向にかけて長さ20m・巾1.2m前後で右側へややカーブぎみの直線を呈し両端は地区外へ延び、深さは10~40cmで中央部がやや深い。断面形は逆台形で覆土は灰褐色土から黒褐色土で下層はやや砂質であり南東端は小礫が多い。南西側の第5号住居址の隣接する付近に集石状の投込みが見られ、礫は10~40cm大の円礫で割れ石が多い。出土遺物は全て小破片で覆土中より出土した須恵器破片・土師器破、他は土師器坏片数点で図示しえるものはなかった。

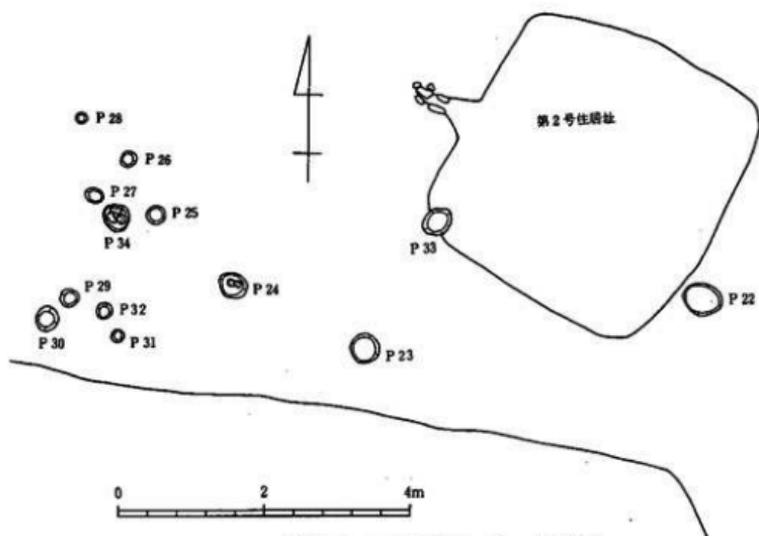
土壌・ピット (第17・18・19・20・27・28図)

遺構Ⅰ地区南西角及び第2号住居址周辺で検出され、便宜上大きさによって土壌とピットに分けたが同じ性質のものと思われる。土壌は概ね長さ・径が50cm以上のもの、ピットは50cm以下のものに分けた。土壌1は溝1の中央東側に位置し大きさは116×90cmの楕円形に近い長方形を呈し深さは26cmで断面形は片側がややなだらかな逆台形を示す。覆土は灰褐色土でわずかに炭化物を含み20~30cm大の円礫が2個見られ、遺物は上面より出土した土師器坏(55)1点のみである。土壌3は南西角寄土壌・ピット群の中央に位置し土壌23に切られる。平面形は140×120cmの不整長方形を呈し深さは34cmを測る。断面形は逆台形で覆土中に多量の炭化物を含み特に底部付近に多く認められた。遺物は土師器の小破片のみで図示しえたものは皿片1点(56)と、北側底部付近に長さ20cm巾7cm厚さ1~2cmの木片が床面より約2cm上で周囲に炭化物が多いなかより出土した。土壌4は土壌3の北側に接し140~90cmの不整楕円形を呈し深さ22cmで断面形は逆台形、覆土中には炭化物を含みやや砂質である。遺物は図示しえるものはなく土師器の破片と形状不明の鉄片のみであった。土壌5は土壌3の南側に位置し132×118cmの不整長方形を呈し、深さは21cm断面形は逆台形で覆土中に炭化物を含む。南側角の壁上に25cm大の石、底部に10cm大の石が認められた。出土遺物は土師器片と須恵器片のみで図示した物は土師器皿片(57)1点である。土壌6は土壌5の南側に位置し径88cmの不整円形を呈し深さ24cm、断面形は逆台形で覆土中には炭化物を含む。底部中央と北側端に10cm大の石が2個存在し、遺物の出土は無かった。土壌7は土壌6南側に有り、形状は80×68

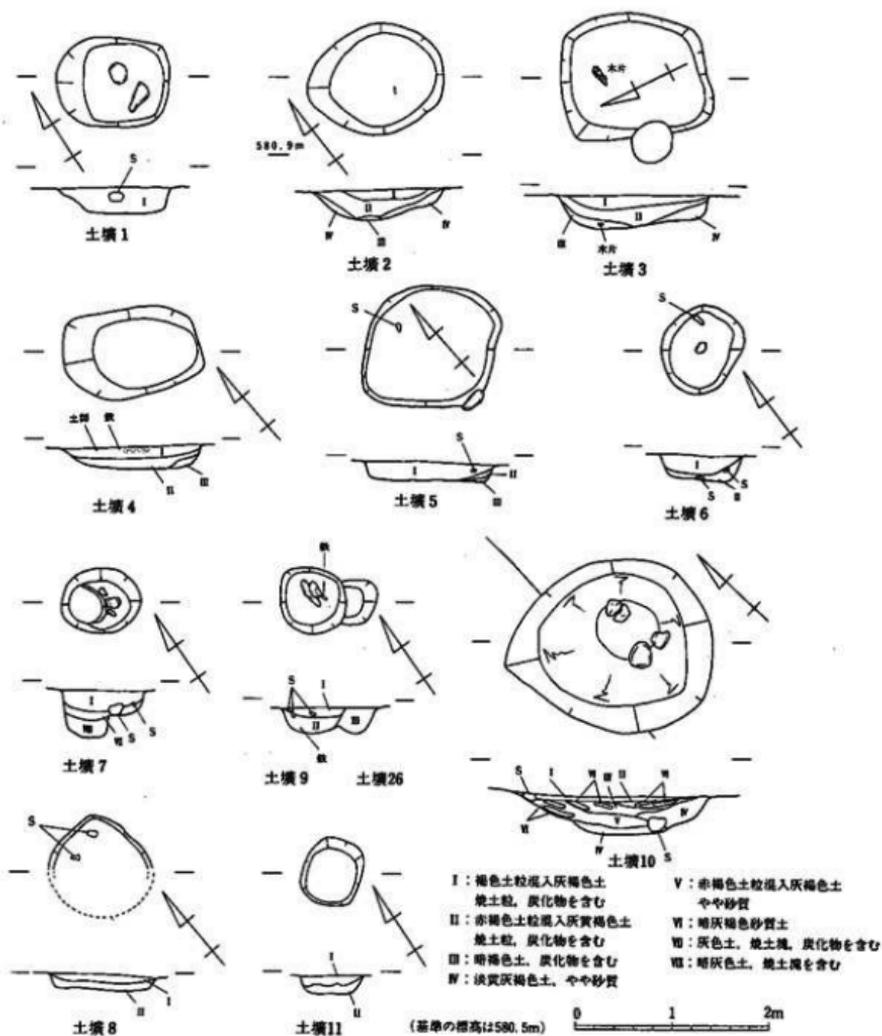
cmの楕円形を呈し深さ48cmと土壌中一番深い。断面形はU字形の二重底で深さ24cmの所に段を有する。覆土は全体的に焼土塊、炭化物を含む灰褐色土から暗灰色土の3層に分層される。特に土壌7は焼土粒を持っており、第Ⅱ・Ⅲ層は特に焼土及び炭化物を多量に含み灰色ないし暗灰色を呈しており灰層ではないかと思われる。段の底部に10~20cm大の石が見られ遺物は図示しえる物はなく、土師器・須恵器の小破片のみで土師器皿の小破片が多い。土壌9は土壌7の西側に位置し土壌26を切る。平面形は径66cmを測る円形、深さ26cmで断面形は楕形である。覆土中には炭化物を含み、Ⅰ層からⅡ層上にかけて20~30cm大の石があり遺物は土器の出土は見なかったが形状不明の鉄片が出土した。土壌10は今回確認された中で最大の214×178cmを測る楕円形で深さ40cmである。地区内中央南端に位置し第1号住居址を切る。覆土は灰褐色土から暗灰褐色土でⅠ~Ⅲ層は炭化物を含みⅡ~Ⅴ層には暗灰褐色砂層が上から流れこんだように入っている。底部付近には20~30cm大の円礫が見られた。土壌16は土壌、ピット群内の北側に位置し平面形状は50×34cmの楕円形で深さ10cmを測る。遺物は土師器破片(59)と皿片を覆土中より出土した。土壌21は土壌、ピット群の南端に位置し平面形状は72×52cmの不整楕円形で深さは17cmを測る。断面形は逆台形で覆土は土壌7と同じく灰色土及び暗灰色土で灰層ではないかと思われる。東側及び西側の壁際に10~20cm大の石が有り東側は長さ20cm巾約10cmの長方形の石が立った状態で壁際に認められた。以上土壌の大きなもの・特徴のあるものについて記述したが全体的には覆土中に炭化物及び焼土を含む・小石を持ったものが多い・深いものには灰層と思われるものがあること等が認められる。次にピットである。覆土の特徴や覆土中に炭化物を含むことは土壌と同じである。特にP₁は焼土、炭化物が多量に含まれ、遺物の出土も見られた。



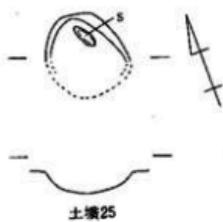
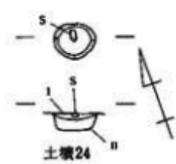
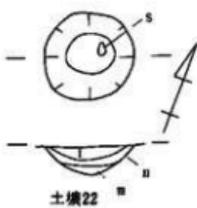
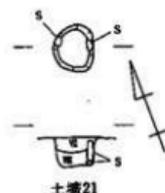
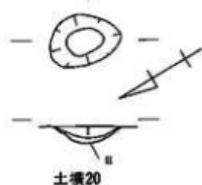
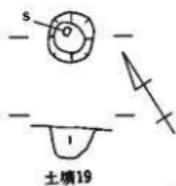
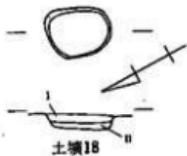
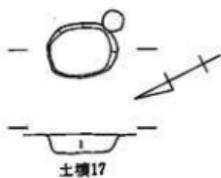
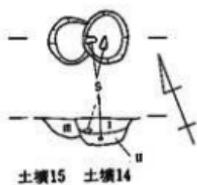
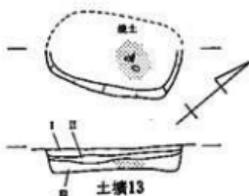
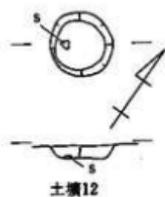
第17図 SKK土壌・ピット群(1)



第18図 SKK土壇・ピット群(2)



第19図 SKK土壌(1)



- I : 褐色土粒混入灰褐色土
炭土粒、炭化物を含む
- II : 赤褐色土粒混入灰質褐色土
炭土粒、炭化物を含む

- III : 暗灰褐色土
炭化物を含む
- IV : 灰色土、炭土塊、炭化物を含む
- V : 暗灰色土、炭土塊を含む

(基準の標高は580.5m)



第20図 SKK土壌(2)

出土炭化物および木片について

本址出土の炭化物および木片は合計13点であり、その出土地点は、I地区の住居址、土塙、ピット内から出土しており、これらについて遺構別にまとめてみると次のようになる。なお樹種鑑定は森 義直氏にお願いし、御教示を得たものであり、炭化物の大きさと量は粉末状のものも含まれているので、おおよその目安である。

1住	床面	アキニレ	3.5×2.5×2 cm	枝のつけ根部分。
#	覆土	アカマツ	小片	
#	"	ヒノキ	2.3×1.2×0.5cm	加工痕のある板状のもの。
2住		キハダ	3.0×3.0×2.5cm	他約30片
4住		クリ材	2.0×2.0×1.5cm	他約15片
#		クリ材	2.0×0.9×0.2cm	他4片 クリ材と樹皮が残っている。
6住		ミズナラ	1.8×1.0×0.8cm	他約20片
土塙3		スギ材	20×7×2 cm	大型の木片であるが、木質部の組織は腐蝕している。
# 4		コナラ	1.0×1.1×0.3cm	
# 9		サクラ	1.5×1.0×0.9cm	他約40片
# 17		ナラ	1.3×1.4×0.7cm	ナラの樹皮
ピット6		サクラ	2.7×2.2×0.8cm	他30片
# 8		モミ他	2.7×2.5×2.2cm	他50片 モミの他クリ、ナラ、クヌギ材が混在。

土塙3から検出されたスギ材は組織が腐蝕しているものの明瞭に年輪もみえる。また第1号住居址覆土出土のヒノキについては全く炭化しているが、細い板状に加工されており、物そのものの形状は不明ながらも、本址の他の出土遺物と同時代に使用されたものと思われる。

今回確認できたものは、少量であるがクリ及びナラなどの落葉広葉樹が多く、次いでヒノキ、モミなどの針葉樹が多い。このことは当時の周辺環境を推測する上で非常に興味深いことであり、資料の集収が望まれる。

(神沢昌二郎)

SKK住居址一覽表

番 号	調査地区内の位置	主軸	形状	大きさ(m)	深さ 高 cm	ピット		カマド		遺物 物 種 (数字は遺物番号)	掘	要
						位置	状態	位置	状態			
1	I地区中央南端	N120°E	方形	4.40×4.54	34	1	東壁中央	石屋	101~119	広さ19.98m ² 土壌10に切られる。覆土中に15~30cm大の石多し		
2	"	N67°W	方形	3.60×3.66	33	0	西壁中央	焼土粒わずか	220~237, 磁石, 鉄	広さ13.90m ² 煙道先端に石を埋め, 覆土中に10~30cm大の石多し		
3	II地区北東	N40°W	長方形	3.76×4.26	29	0	西壁内	石屋	238~245, 磁石	広さ13.89m ² 中央部覆土中に15~30cm大の石多し		
4	"	N28°E	方形	4.04×3.68	26	3	北壁東寄	石と粘土	446~451	広さ14.87m ² 中央部覆土中に15~50cm大の石多し		
5	I地区南東角	"	方形	4.10×3.76	19	0	不明	不明	552~554	広さ15.42m ²		
6	I地区北西角	"	長方形	4.12×3.12	14	7	加床伊 土	加床伊 土	磁器片, 釘	広さ12.85m ²		

SKK土壌一覽表

番 号	調査地区内の位置	平面形状	新形状	大きさ (cm)	残存高 (cm)	出土遺物(○数字は遺物番号, 他は出土点数)				掘	要
						土器	須恵器	灰陶	鉄		
1	I地区中央西寄	楕円に近い長方形	逆台形	180×80	26	1	○				20~30cm大の石有
2	"	楕円形	瓶	102×110	30	1	○	17			
3	"	不整形長方形	逆台形	140×120	34	2	2	6	5		1040
4	"	不整形内形	"	140×80	22	2	4	1	○	1	
5	"	不整形方形	"	120×120	21	4					10cm大の石有, 雨角上面に25cmの石有
6	"	不整形円形	"	壺	24						10cm大の石有
7	"	楕円形	U字の二重壁	楕円×66	4800	1	5	11	1	1	西側が深い, 10~20cm大の石有
8	南西角南	円形	逆台形	楕円×7	16	1					10cm大の石有, 地区外へかかる
9	南西角西	円形	瓶	楕円×66	26					2	20~30cm大の石有, 土層26を切る, 炭化物
10	中央南端	楕円形	"	240×120	40					5	20~25cm大の石有, 1径を切る
11	南西角寄	円形に近い方形	逆台形	楕円×64	18						
12	"	円形	"	楕円×64	12						
13	中央西端	不明	"	140×?	23					16	6cm大の石有, 地区外へかかる
14	"	円形	"	楕円×54	27					1	土層15を切る, 10cm大の石有
15	"	"	"	"	20						土層14に切られる
16	"	楕円形	逆台形	楕円×34	10	2					
17	南西角寄	"	"	楕円×54	20						
18	南西角西	"	"	楕円×56	13						
19	南西角	円形	U字	楕円×80	30						炭化物

番 号	調査地区内の 位置	平面形	断面形	大きさ (cm)	現存高 (cm)	出土遺物						鐵	その他	備 考	
						土器		須恵器		灰釉 陶器	鉄				その他
						壺 罎	壺 罎	壺 罎	壺 罎						
20	〃 中央西端	不整形円形	楕形	70×52	17					1					
21	〃 南西角	〃	辺台形	60×40	30				2						東端に長さ20cmの立石有
22	〃 中央西端	円形	楕形	30	30					1					15cm大の石有
23	〃 南西角寄	〃	辺台形	楕形	30										土壌3を切る
24	〃	〃	〃	〃	18										
25	〃 南西角	不明	楕形	楕形?	38						1				地区外へかかる
26	〃 南西内西	不整形円形?	U字形	70×71	24				4						土層9に切られる

SKKピット一覽表

番 号	調査地区内の 位置	平面形	断面形	大きさ (cm)	現存高 (cm)	出土遺物						鐵	その他	備 考		
						土器		須恵器		灰釉 陶器	鉄				その他	
						壺 罎	壺 罎	壺 罎	壺 罎							
1	1地区中央西寄	楕円形		40×30	21											褐色土層灰褐色土、炭化物、燐土粒
2	〃 南西角寄	円形		楕形	23											〃
3	〃	〃		楕形	28											〃
4	〃	〃		楕形	26											炭化物
5	〃	〃		楕形	5											10cm大の石
6	〃	不整形円形		楕形	23											褐色土層灰褐色土、炭化物
7	〃	円形		楕形	11											〃 底部は灰色土、燐土、炭化物が多い
8	〃 南西角西	〃		楕形	24	3	1	3								褐色土層灰褐色土、炭化物
9	欠番															〃
10	1地区南西角寄	楕円形		22×18	22											〃
11	〃	円形		楕形	20											〃
12	〃	〃		楕形	10											〃 小石
13	〃	〃		楕形	23											〃
14	〃	楕円形		楕形	22											〃
15	〃	不整形円形		34×28	25											〃
16	〃	楕円形		34×20	26											〃
17	欠番															炭化物、燐土粒
18	〃															

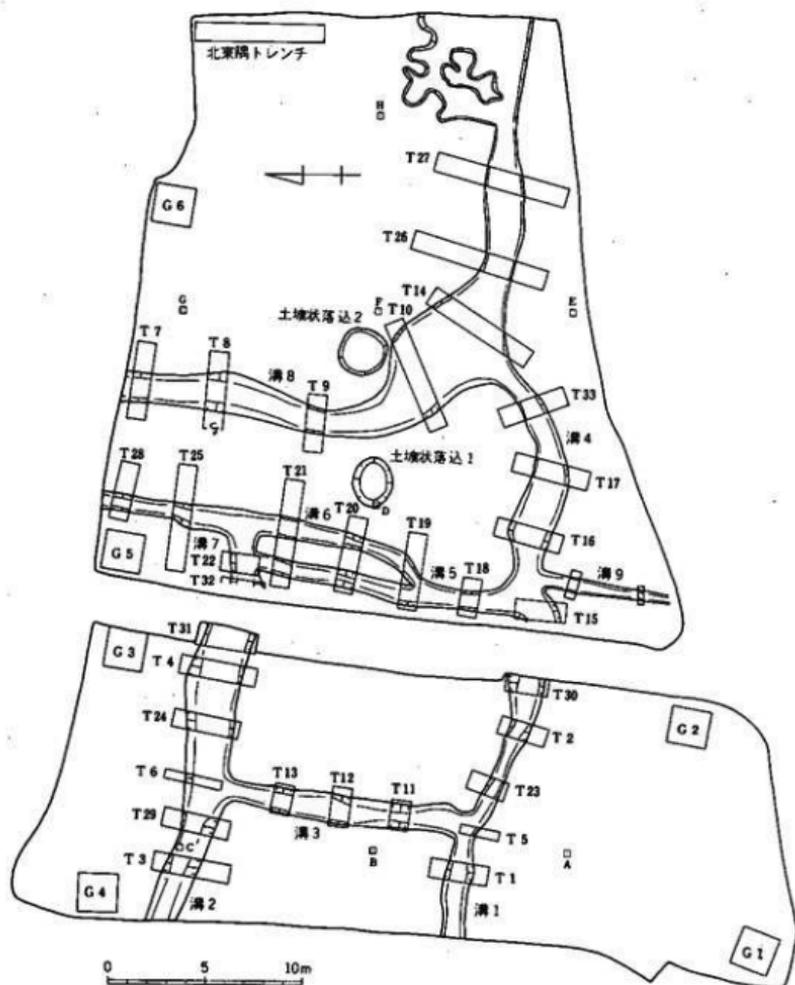
番 号	調査地区内の 位置	平 面 形	断 面 形	大きさ (cm)	出土遺物			備 考		
					残存高 (cm)	土 師 器			鉄	その他
						瓦又は灰 器	皿 杯			
19	I地区南西角	不整形	円形	直径 20					褐色土混灰褐色土、炭化物、小石	
20	"	"	"	直径 15					褐色土混灰褐色土	
21	"	"	"	直径 30					" 炭化物	
22	中央南端	"	"	直径 7					褐色土混灰褐色土	
23	中央南端	"	"	直径 22					"	
24	"	楕円形	"	直径 16					20cm大の石	
25	"	円形	"	直径 15					褐色土混灰褐色土	
26	"	"	"	直径 7					"	
27	"	楕円形	"	直径 10					" 炭化物	
28	"	円形	"	直径 16					"	
29	"	"	"	直径 21					"	
30	"	"	"	直径 19					"	
31	"	"	"	直径 14					"	
32	"	"	"	直径 15					"	
33	"	楕円形	"	直径 20					2枚を切る	
34	"	"	"	直径 25					20cm大の石	
35	中央南端	円形	"	直径 10					1枚を切る	

SKK出土土器観察表

地 号	出土地点	種 別	形 状	寸 法 (cm)	色 面 調			成 形・調 整、形 態 の 特 徴	備 考
					口 径	底 径	器 高		
101	第1号住居址	土 師 器	杯	口径 15.3 底径 6.5	5.5	黒褐色	黒-黒褐色	口外ノズリ、底部回転成形、底部外周半片へラミガキ	内黒
102	"	"	"	口径 14.4 底径 5.4	6.1	明灰-灰褐色	黒	口外ノズリ、底部回転成形、底部外周半片へラミガキ	内黒
103	"	"	"	口径 13.3 底径 5.8	3.6	淡黄褐色	淡黄褐色	口外ノズリ、底部回転成形	口縁黒、断面黒れる、取取
104	"	"	"	口径 5.5		茶褐色	一部黒	口外ノズリ、底部回転成形	粘土に石英、長石、雲母
105	"	"	"	口径 5.0		黒	黒	口外ノズリ、底部回転成形、内面へラミガキ	内外面黒色
106	"	"	"	口径 14.4 底径 6.6	4.5	茶褐色	"	口外ノズリ、底部回転成形	内黒
107	"	"	"	口径 6.7		薄茶褐色	"	底部回転成形	内黒
108	灰物陶器	甕	"	口径 18.0 (8.8)	6.2	明灰白	明灰白	底部へラミガキ、ナズ調整、高台外周に黒、口縁丸く曲げる	粉状薄
109	"	"	"	口径 16.9		灰白	灰白	底部へラミガキ、ナズ調整、口縁丸く曲げる	粉状緑色、刷毛がけ
110	"	"	"	口径 16.8		"	"	底部へラミガキ、ナズ調整、口縁丸く曲げる	粉状緑色、刷毛がけ

No	出土地点	種別	形状	寸法 (cm)		色		調		形成・調整、形態の特徴	備考
				口径	底径	高さ	外	内	内		
111	第1・2号住居址	灰輪陶器	皿	14.8	(6.6)	4.8	灰白	灰白	灰白	体部へラケズリ、ナデ調整、高台外面に彫、口縁えく曲げる	釉状緑色、黒毛がけ、蓋部同組合
112	第1号住居址	"	皿	13.5	5.8	3.0	"	"	"	体部へラケズリ、ナデ調整、高台外面に彫、口縁えく曲げる	釉状緑色、つががけ、器厚を中厚
113	"	土師器	小形甕	"	8.3	"	茶褐	こけ茶	"	口縁カキ目状の縁条痕	体部薄手
114	"	"	甕	21.4	"	"	茶褐	茶褐	"	外面体部へケ目、横ナデ、内面おさえ	内面荒れる
115	"	"	甕	24.0	"	"	褐一暗灰	暗灰	"	外面体部へケ目、横ナデ、内面おさえ	"
116	"	"	"	19.9	"	"	茶褐	茶褐	"	外面体部へケ目、口縁横ナデ、内面おさえ	"
117	"	"	"	10.2	"	"	茶灰	"	"	外面体部へケ目内面おさえ	"
118	"	須恵器	壺	"	"	"	暗灰	暗灰	"	口縁横ナデ	粘土緑の巻き上げ灰
119	"	灰輪陶器	短頸甕	12.2	"	"	灰白	灰白	"	口縁横ナデ	緑灰色
220	第2号住居址	土師器	坏	15.7	7.1	5.5	薄茶褐	暗茶	"	口縁横ナデ、底面回転糸切痕、内面へラミガキ、面に暗文	内黒、外面荒れる
221	"	"	"	11.6	(6.8)	3.8	茶褐	黒	"	口縁横ナデ、口縁横ナデ、内面へラミガキ	内黒、外面調整丁寧
222	"	"	"	14.2	7.6	3.8	緑	"	"	口縁横ナデ、底面回転糸切痕、内面へラミガキ	軟質
223	"	須恵器	"	13.9	7.4	3.3	淡灰白	淡灰白	"	口縁横ナデ、底面回転糸切痕	軟質
224	"	"	"	13.2	6.5	3.2	"	"	"	口縁横ナデ、底面回転糸切痕	軟質
225	"	"	"	14.4	"	"	"	"	"	口縁横ナデ	軟質、器面荒れる
226	"	"	"	6.0	"	"	淡茶灰	淡茶灰	"	底面回転糸切痕	軟質
227	"	"	"	12.7	"	"	淡灰白	淡灰白	"	口縁横ナデ	軟質
228	"	灰輪陶器	甕	"	6.2	"	灰白	灰白	"	高台外面に彫、体部へラケズリ	釉状青、底面外面調整
229	"	"	"	7.0	"	"	"	"	"	高台外面に彫、体部へラケズリ	釉状緑色、底面外面調整
230	"	"	"	14.1	7.0	4.8	"	"	"	体部へラケズリ、ナデ調整、高台外面に彫、口縁えく曲げる	釉状緑色、つががけ、器厚を中厚
231	"	"	"	13.2	"	"	"	"	"	体部へラケズリ、ナデ調整、口縁えく曲げる	釉状緑色、刷毛がけ
232	"	土師器	甕	22.7	"	"	褐	褐	"	外面体部へケ目、横ナデ、内面カキ目	器面荒れる
233	"	"	"	20.8	"	"	茶褐	茶褐	"	外面体部横ナデ、内面おさえ	内面灰色の付着物
234	"	"	"	22.3	"	"	"	"	"	外面体部横ナデ	"
235	"	須恵器	壺	"	23.5	"	"	"	"	口縁横ナデ、横ナデ	"
236	"	"	長頸甕	11.5	"	"	薄茶褐	薄茶褐	"	口縁横ナデ	内面に黒色の付着物
237	"	灰輪陶器	小甕	"	"	"	灰白	灰白	"	体部へラケズリ、ナデ調整、面に丸み	釉状緑色、刷毛がけ
338	第3号住居址	土師器	皿	9.2	4.6	2.0	茶褐	茶褐	"	体部上中・口縁付近横ナデ、底面回転糸切痕	内面底部に同心円状の筋
339	"	"	"	8.2	5.1	1.6	"	"	"	体部上中・口縁付近横ナデ、底面回転糸切痕	"
340	"	"	寫皿	0.1x0.1	5.0	2.1	暗灰褐	淡茶褐	"	底面回転糸切痕	内・外面黒色の付着物
341	"	"	坏	6.0	"	"	暗茶褐	暗茶褐	"	口縁横ナデ、底面回転糸切痕	外側面に黒毛がけ
342	"	"	"	6.1	"	"	茶褐	茶褐	"	口縁横ナデ、底面回転糸切痕	外側面に黒毛がけ
343	"	"	高台外	4.3	"	"	"	"	"	高台外外面横ナデ	"

No	出土地点	種別	形状	寸法 (cm)		色		調		成形・調整、形態の特徴	備考
				口径	高さ	外面	内面	外面	内面		
344	第3号住居址	土器器	高台皿	5.7		黒茶褐	内面黒			高台内外面黒ナリ	粗面な成形、器面荒れる
345	"	"	皿	8.3	(4.8)	茶褐	茶褐			体部上半・口縁付近黒ナリ、底部暗赤系切痕	内面黒色の付着物
446	第4号住居址	"	杯	14.0	7.0	淡茶褐	黒褐～灰褐			口縁付近黒ナリ、口縁部暗赤系切痕	外面黒色の付着物
447	"	須臾器	"	14.0		薄茶	薄茶			口縁付近黒ナリ	酸化始成状
448	"	土器器	高台皿	(3.7)		茶褐	茶褐				粗面、器面荒れる、小石まじり、
449	"	"	"	5.2		薄茶	薄茶			高台内外面黒ナリ	粗面な成形
450	"	"	杯	5.9		薄茶や中暗	薄茶や中暗			底部暗赤系切痕	軟質
451	"	灰物陶器	広口瓶	15.4		淡灰	淡灰			体部ヘラケズリ	黒淡緑色、刷毛がけ
552	第5号住居址	土器器	杯	14.0	(7.6)	淡茶	淡茶～茶褐			口縁丸く、内面ヘラミガキ	軟質で外面荒れる
553	"	灰物陶器	甕	16.4	7.8	灰白	灰白			体部ヘラケズリ、ナリ調整、高台外面磨、口縁丸く、削ける	黒淡緑色、刷毛がけ、底部外
554	"	土器器	甕	21.5		暗茶褐	暗茶褐			外面体部ヘラミガキ、横ナリ、内面カキ目	軟質
55	土壇1	"	杯	12.9	5.7	淡茶褐～灰褐	淡茶褐～灰褐			口縁ヨコナリ	器面荒れる
56	土壇3	"	皿	10.0	(5.9)	茶褐	茶褐			口縁黒ナリ	内面に黒色の付着物
57	土壇5	"	"	10.0	(6.0)	淡茶褐	淡茶褐			口縁黒ナリ	
58	土壇10	"	"	7.0	3.8	"	"			口縁黒ナリ	
59	土壇16	"	甕	6.9		褐	褐			口縁黒ナリ、内面ヘラミガキ	内黒



第21図 SMH調査地区全体図

B 南中遺跡 (第21・22・27回)

溝

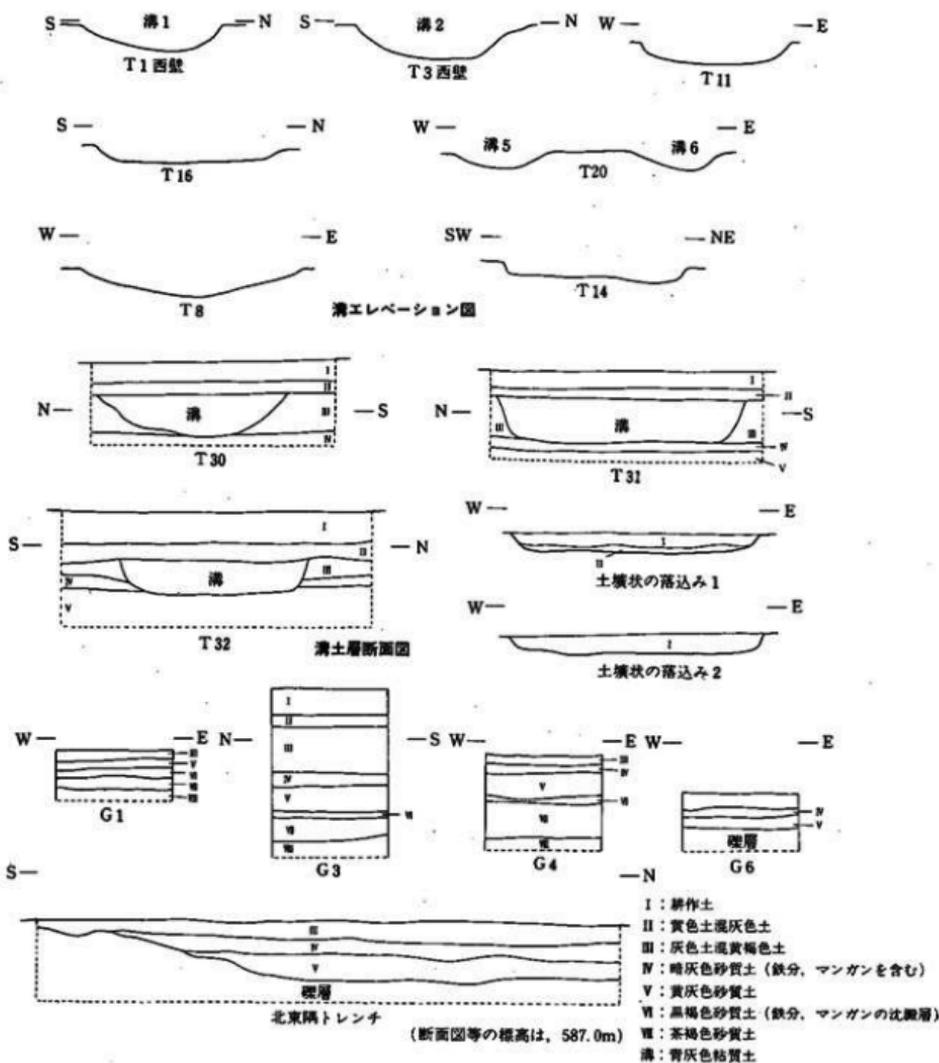
耕作土下60cmで溝が検出された。溝1～9である。平面的に見れば全ての溝が接続するので本来同一の溝である。検出面での巾はまちまちで50cm～4.5mでありT31, 32の断面観察によると溝は第三層の灰色土混黄褐色土層から掘込まれており、深さは10cm～40cm前後の比較的浅いものである。断面形は皿形を呈し、覆土は青灰色粘質土であるが部分的には鉄分等の沈澱物を含み黄灰褐色を呈している。非常に不鮮明でわかりにくい。比較的状态のよかったものは溝1及び溝3である。かつて水の流れがあったと思われるが方向は西から東へが原則で溝3, 5, 6, 9は北から南の方向に流れたと思われる。溝8は途中で溝4と合流し南流から東流へと変わる。溝8の東端は不整形な落込み状になっており礫層上に青灰色土がある。深さは約20cm前後である。

土壇状の落込み

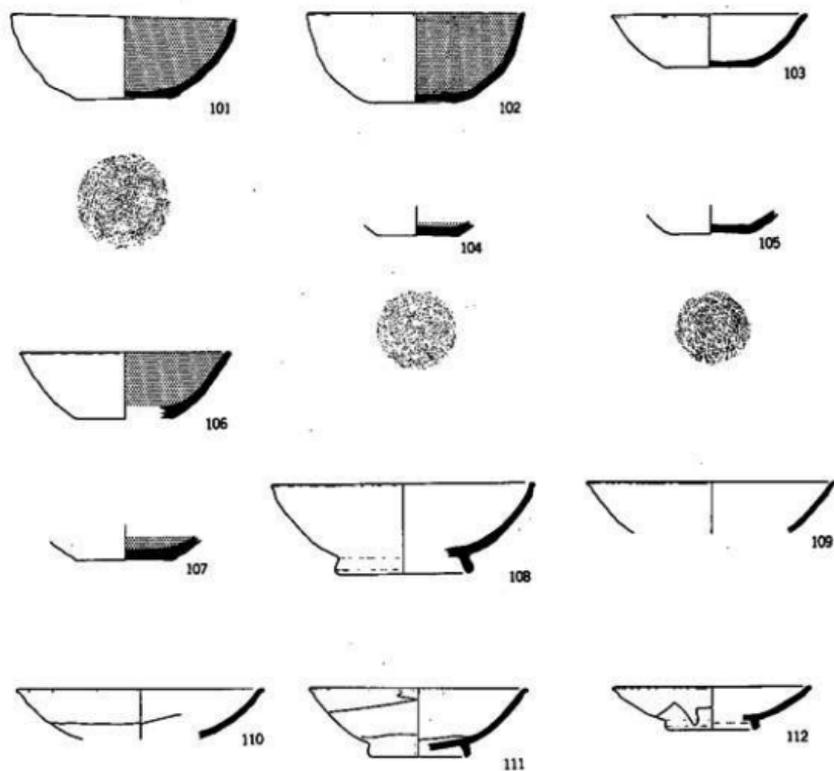
1, 2の2基がある。1は溝6と8の間に位置し、2.5m×2mの楕円形を呈し深さは20cm前後である。断面形はたらい状であり覆土は青灰色を呈し粘質である。溝と同様で非常に不鮮明である。2は溝8の東側に位置する。径2.5mの円形を呈し深さは20cm前後である。断面形はたらい状であり覆土は1と同様である。

遺物

全てが小破片である。検出面全体に出土している。溝及び土壇状の落込み内からは土師器片数点の出土を見たのみであった。種別は土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶磁器であり器種は坏、甕、瓶などである。摩滅しており図示したものは1～3の3点のみである。1は土師器甕の底部片、底径は推定で8cm、外面は底部付近までハケ目が見られ内面はオサエ痕が見られる。2は土師器の甕底部片である。推定底径は6.5cmで内面黒色処理が施されている。3は灰釉陶器甕の底部片であり高台は、内外ともに外側へ開く。釉は淡緑色を呈し体部下半まで施釉してある。

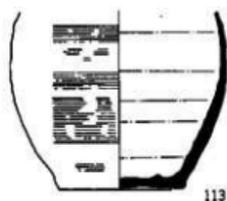


第22図 SMH溝エレベーション図・土層断面図



第23図 SKK第1号住居址(101~112)出土土器

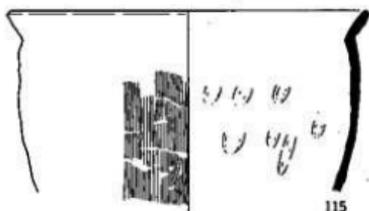
0 5 10cm



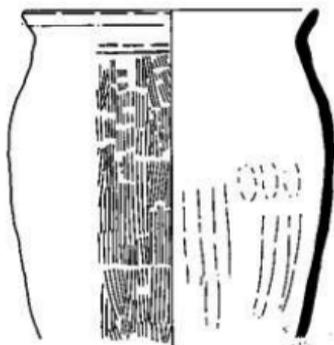
113



114



115



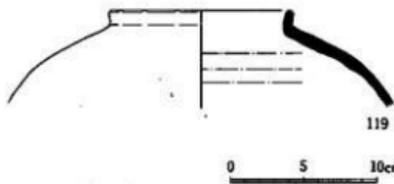
116



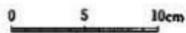
117



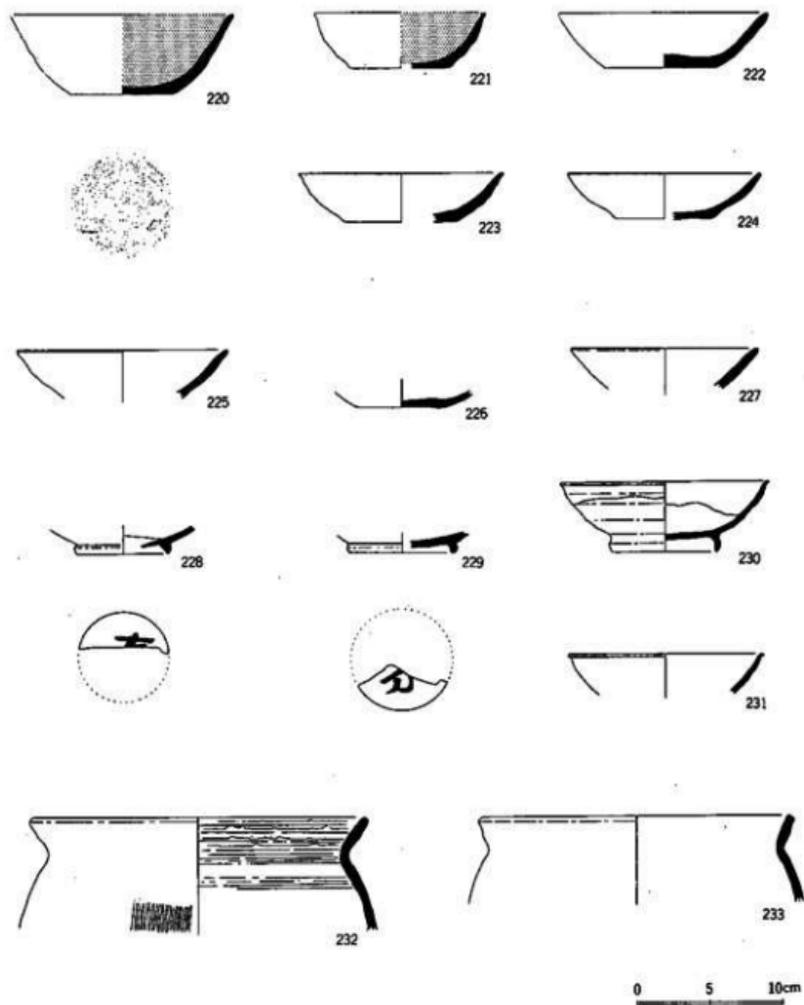
118



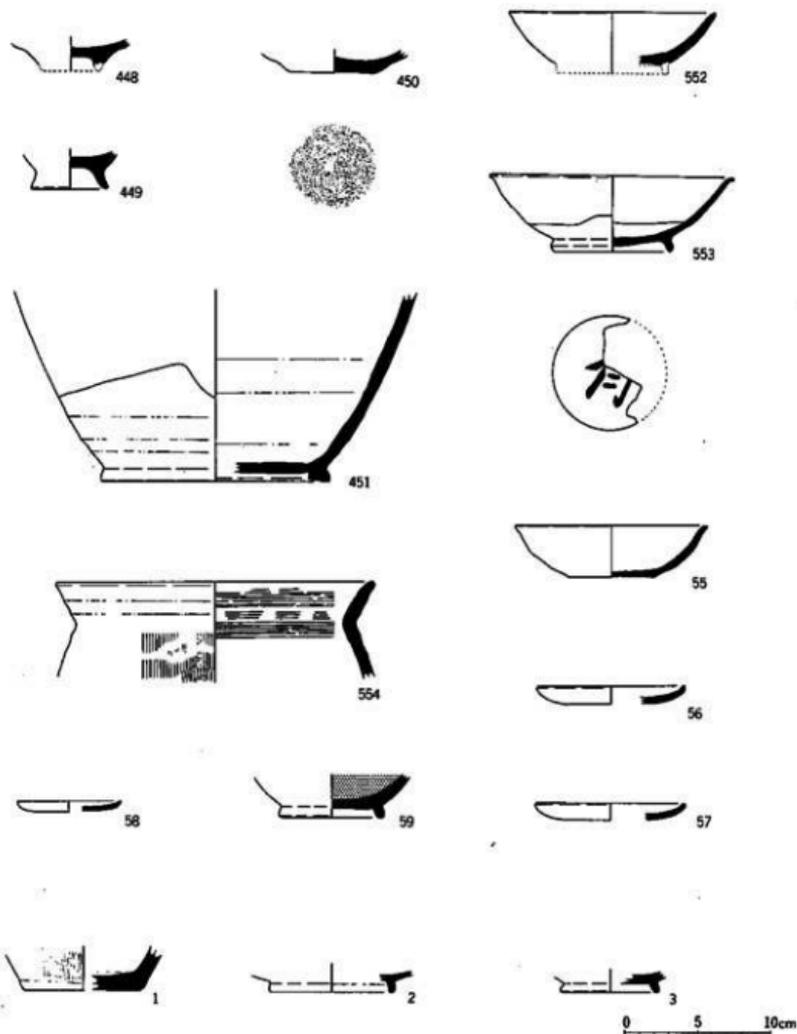
119



第24図 SKK第1号住居址(113~119)出土土器



第25图 SKK第2号住居址(220~233)出土土器



第27图 SKK第4号住居址(448~451), 第5号住居址(552~554),
土境1~16(55~59), SMH(1~3)出土土器



第2号住居址



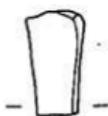
溝 1



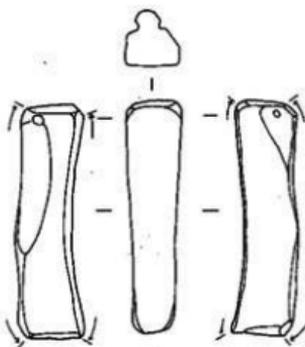
土境25枚出面



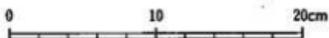
第6号住居址



第2号住居址



第3号住居址



第28图 SKK鉄, 石製品

第4章 調査のまとめ

調査所見

1. 住居址について

今回の調査で確認された住居址は6軒である。第6号住居址は青磁片の出土によりまたカマドが無く、地床炉であることから中世の住居址である。第1号住居址、第2号住居址、第5号住居址は、供膳形態の主体が土師器で須恵器は大形器種の出土は見られるものの坏類はごく僅かである。土師器坏と共に灰軸陶器甕の出土が多い。土師器坏は底部が小さく、内面にミガキがないもの、内黒の杯も底部が小さく一部へう削りされているものの回転糸切痕が残り、体部にもロクロ挽き痕が残る。須恵器坏は青灰色を呈するものは1点もなく、灰白色を呈するものがほとんどで褐色を呈するものもわずかに出土する。灰白色のものは非常に軟質である。灰軸陶器甕は全体に薄く仕上げられ、口縁端部は外側に丸く曲げられ、高台外側に稜をもつ。軸は刷毛がけのことが多い。これらのことから第1、2、5号住居址の時期は平安時代後半頃と考えられるが灰軸陶器との関係は若干問題が残る。第3号住居址、第4号住居址は、土師器内黒の坏類がほとんど見られず黒色未処理のものが大半である。皿の出土多い。罎蓋の破片も見られる。須恵器坏類は灰白色を呈するが少ない。灰軸陶器甕も少ない。以上のことから平安時代末ころと考えたい。

今回確認された6軒の内第1～4号住居址には集石状の石が見られた。第1、3、4は住居址中央部及びカマド周辺の床面から覆土中に多い。第2号住居址は住居址内全体の覆土中に見られた。石の大きさは、10cm大から50～60cm大の円礫が多い。第1、4号住居址には焼けた花崗岩も見られ、カマドが壊されていることから考えて、この一部が含まれていると思われる。第3号住居址には花崗岩は見られずカマドも壊されていない。覆土中の石は床面より10cm前後浮いている。住居の廃絶時に石の投込みがあったと思われるがここでは報告するにとどめこの石の意味するものは今後の課題としたい。

2. 溝状遺構について

南北方向に2本検出された。調査地区外にかかり全容を知り得ない。深さは溝1が40cm前後、溝2が30cm前後である。遺物は、土師器甕片、坏片、須恵器甕片、鉄製品片でありいずれも小破片である。全て覆土内からの出土である。また集石状の石が溝1で3ヶ所、溝2で1ヶ所確認された。溝1西南端のものが一番大きく石の量も多い。石の大きさは10～40cm大の円礫で内に花崗岩も含まれている。集石状の内に土器片も見られる。出土した遺物については住居址内出土遺物と同様のもの

のでありまた集石状の石の投げ込み状態も似ている。以上のことから溝の所属時期は住居址の時期と同様、平安時代後半頃と考える。

3. 土壌及びピットについて

土壌とピットに分けたかほとんどが同様の性格のものと思われる。覆土中に炭化物が含まれており、特に土壌3、ピット8に多く、土壌13、ピット16に焼土、土壌7、21には灰層があり、また石を持つものがある。土壌21は長方形の石が壁際に立っていた。これらのことから墓塚と考えられる。土壌内部から骨の出土は確認されなかった。

出土遺物は全体的に少なかった。須恵器は少なく、8点、灰釉陶器は1点、ほとんどが土師器である。土師器の坏類は黒色未処理のものは土壌1の上面から出土したほぼ完形の坏のほかは2点出土しただけで多くは内黒土器である。皿はほとんど小破片であるが出土の割合は高い。底部と体部がはっきりしない。以上のことから見てこれらの所属時期は平安時代後半から一部中世に入るものと考えられる。

4. 住居址の相互関係

第1号住居址と第2号住居址の所属時期は前記1で平安時代後半と記した。111の灰釉陶器片は第1号住居址床面より出土した体部破片4点と第2号住居址覆土下層出土の底部及び口縁破片2点とが接合したものである。住居址の位置関係を見ると両住居址共にI地区の南寄にあり、3.6mの間隔をおいて東西に隣接する。カマドの位置は第1号住居址は東壁中央に構築され、第2号住居址は西壁中央に構築されている。この位置なら2つの住居址共に煙の影響を受けずに済む。これらのことから第1号住居址と第2号住居址は同一時期のある期間並行して居住していたものと考えられる。

第3号住居址と第4号住居址は同じ様な遺物の出土がある。また立地からいっても上記と同様の関係も考えられるが遺物の接合はない。

参考文献

- 筑沢 隆徳「長野県中央道徳蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 諏訪市その4」昭和50年度
茅野市教育委員会「高部遺跡」1983

松本市内出土の灰釉陶器 (第29回)

長野県内から出土する灰釉陶器には猿投・尾北・東濃・美濃須衛などの産地のものがあるが、言うまでもなく東濃産が最も多い。1981年の愛知陶磁資料館でのシンポジウム以降、灰釉陶器の編年は大きく変化し、これに伴ない折戸53号窯式期に代表される猿投窯での編年のほかに東濃窯での編年も整備された。今回、楢崎彰一、田口昭二、斉藤孝正の3氏から東濃産の灰釉陶器について貴重な御教示を得ることが出来たため、浅学をも顧ず東濃産の編年^(注)に従って最近の松本市内の発掘調査で得られた資料を概観したいと思う。

黒笹14号窯式期 下神遺跡第12号住居址出土の猿投産の平瓶02がある。この時期、東濃での灰釉陶器生産は開始されておらず、現時点で該期の資料はこの平瓶1点のみである。

光ヶ丘1号窯式期 北方遺跡第1号住居址出土の碗(1)、同2号住居址出土の小瓶01、同5号住居址出土の碗(3)などがある。碗は底部から口縁部付近に至るヘラケズリによって薄く仕上げられ、口端部はまるく曲げられている。底部はヘラケズリ、ナデ調整によって糸切り痕が消されており、外面が内側に屈曲する高台(三日月高台)が付く。釉は一筆のハケぬりとなっており、見込みにも施釉される場合がある。本窯式は猿投の黒笹90号窯式に併行する。

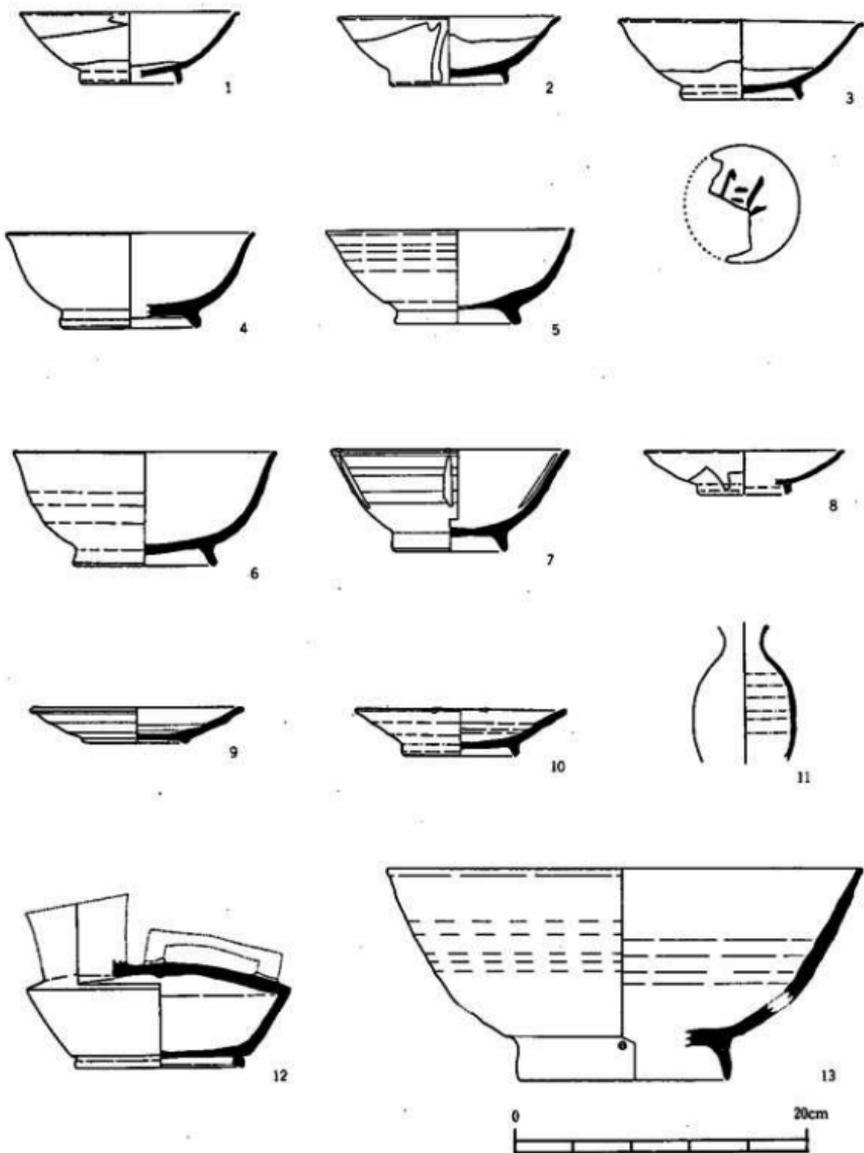
大原2号窯式期 南栗遺跡第6号住居址出土の碗(2)、島内1号住居址出土の皿(8)、が該当する。碗では釉がつけかけとなり、ヘラケズリも底部から体部下半までとなる。底部の糸切り痕はヘラケズリ、ナデ調整によって消され、三日月高台が付くものが多い。形態的には前窯式と同様であり、口端をつまみ出す点などかなり似ている。本窯式は猿投の折戸53号窯式期に相当する。

虎溪山1号窯式期 神戸1号住居址出土の輪花皿04、同20号墓址出土の碗(6)、輪花碗(7)、皿(9)、鉢03、広口瓶などがある。碗はいわゆる深碗が盛行する。底部から腹部までヘラケズリされ、糸切り痕は消されている。釉はつけかけである。輪花碗はヘラまたはユビで長く胴部下半まで輪花が施されている。鉢は本窯式期に特徴的な器種である。皿は底部に糸切り痕を残すものもあるが高台は古い様相を残している。本窯式は猿投の東山72号窯式期に併行する。

丸石2号窯式期 神戸遺跡1号住居址出土の碗(4)、同第2号住居址出土の碗(5)、同第20号墓址出土の皿などがある。碗は前窯式に比してやや浅くなり、口縁部もやや外反ぎみとなる。底部に糸切り痕を残すものが多く、ヘラケズリも高台接合部付近だけに施されるものが多くなる。皿では高台が断面三角形を呈するものが多く、糸切り痕を残すものが殆んどで明らかに手抜き傾向が窺われる。本窯式期は猿投の百代寺窯式期に相当するが本窯式期をもって灰釉陶器の生産は終了し以後山茶碗へと変化する。

(田中正治郎)

(注) 土岐市陶磁歴史館編 1983、田口昭二による。



第29図 松本市内出土の灰軸陶器

結 び

今回の調査は島内地区の県営ほ場整備事業に伴う事前の緊急調査であり、同地区では昨年の中遺跡に続き2回目の発掘調査である。島内遺跡群は西側の梓川と東側の奈良井川に囲まれた水田地帯を広い範囲にわたって分布し、内にくつかの遺跡が知られている。南から高松遺跡・南中遺跡・北中遺跡・北方遺跡・上平瀬遺跡等がある。これらの遺跡は今まで知られているところでは平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器などの出土が確認されている。今回の調査遺跡は、これらの内の北方遺跡及び南中遺跡の一部について実施したものである。

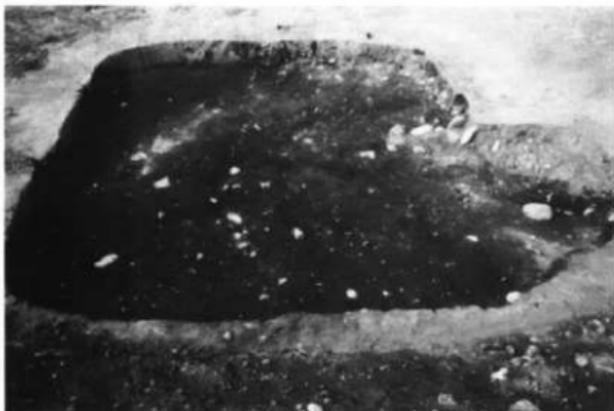
北方遺跡は南西方向より延びる微高地に立地する遺跡で今回の調査地の釜海渡地籍は東端に位置する。釜海渡地籍は以前から地元の研究者大久保知巳氏により平安時代の土師器を出土することが確認されており、調査地の決定となった。調査の結果は本書のとおりであるがまとめてみると、住居址が6軒で内訳は平安時代後半頃のものが3軒、平安時代末頃のものが2軒、中世に入るものが1軒である。他の遺構は溝状遺構2本、時期は平安時代後半頃、平安時代後半から中世にかけての墓塚と考えられるものが6基確認された。遺物はこれらの遺構に伴う土師器環類、甕、小形甕、皿、灰釉陶器碗、皿、小瓶、広口瓶、須恵器環、甕で他に砥石、鉄製品、木片の出土を見た。同遺跡の時代的特徴は全体的に須恵器の環が少なく、あっても粗雑な作りであること、これに代って土師器環及び灰釉陶器碗の出土が多くなることなどがあげられる。

来年度は中央道長野線予定地を挟んで西側が県営ほ場整備の対象地区となるため、これに伴い今回の調査は当調査地の南西側になるものと思われる今後の調査が期待される。

南中遺跡は南西方向より延びる微高地に立地し、今回の調査地は南端の段丘上に位置する。前記の大久保知巳氏によりその周辺で平安時代及び中世の土器片の出土が確認されている。調査で確認されたものは溝が9本、土塊状の落込み2基のみで遺物の出土は土師器環、須恵器片、灰釉陶器碗、中世陶磁器の小破片のみであった。溝も自然の流れて遺物も流されてきたものと思われる。同遺跡も今後のほ場整備等に伴う調査により全容を知ることが望まれる。

最後に炎天下を長期にわたり調査に参加し御協力をいただいた大久保知巳氏をはじめとする調査員の方々、調査補助員の学生諸君、島内史談会及び北方地区のみなさまに対して衷心より感謝申し上げます。
(神沢 昌二郎)

圖 版



SKK
第1号住居址



SKK
第1号住居址
集石状の投込み



SKK
第1号住居址
床面遺物出土状態



SKK
第1号住居址
カマド



SKK
第1号住居址
カマド遺物出土状態



SKK
第2号住居址



SKK
第2号住居址
集石状の投込み



SKK
第3号住居址



SKK
第3号住居址
集石状の投込み



SKK
第3号住居址
カマド



SKK
第4号住居址



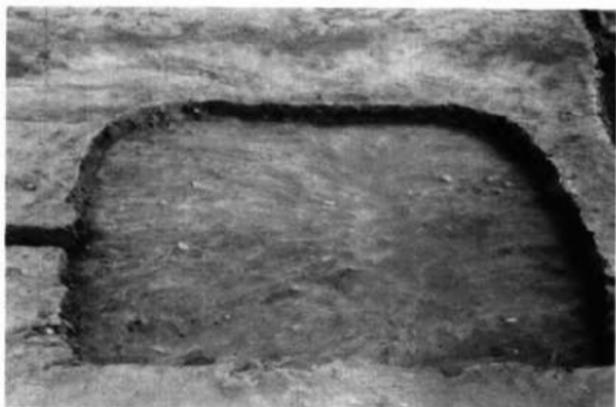
SKK
第4号住居址
集石状の投込み



SKK
第4号住居址
カマド



SKK
第4号住居址
遺物出土状態(446)



SKK
第5号住居址



SKK
第6号住居址



SKK
土壇、ビット群



SKK
ビット群



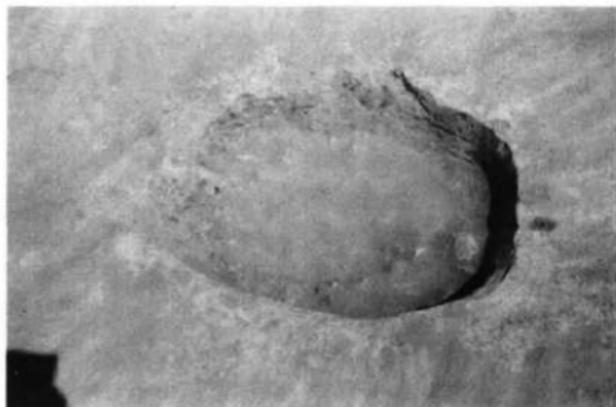
SKK溝 1



SKK溝 2



SKK土壇 1



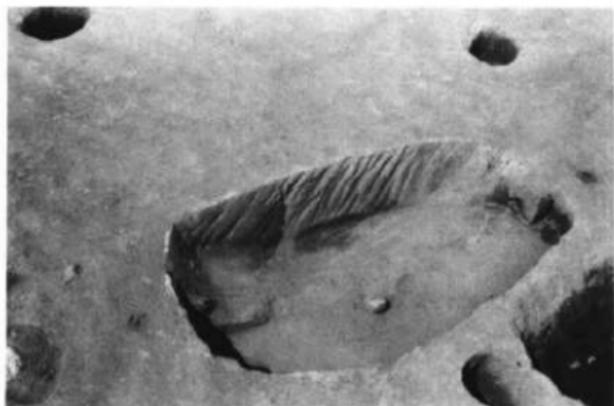
SKK土壙 2



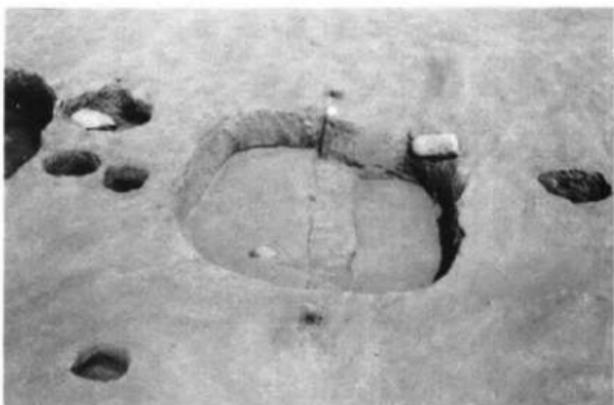
SKK土壙 3



SKK土壙 3
木片



SKK
土壇 4



SKK
土壇 5



SKK
土壇 6



SKK土壤 7



SKK土壤 9, 26



SKK土壤 10



SKK土壤14



SKK土壤19



SKK土壤21



SKK土壇24



SMH
西側全景



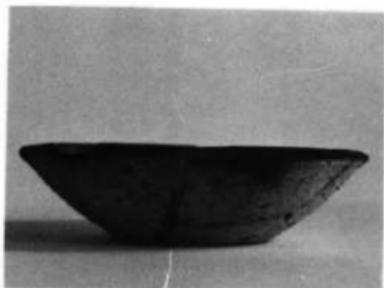
SMH
東側全景



SKK 101



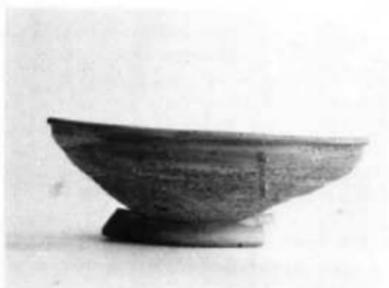
SKK 102



SKK 103



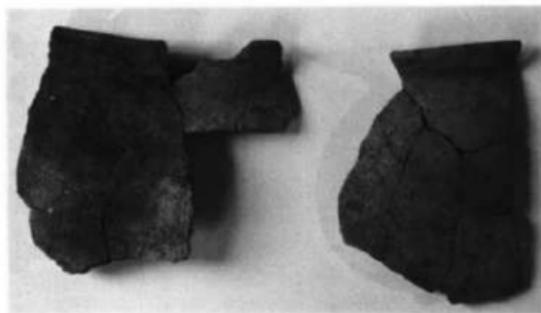
SKK 108



SKK 111



SKK 113



SKK 115

SKK 114



SKK 116



SKK 117



SKK 220



SKK 221



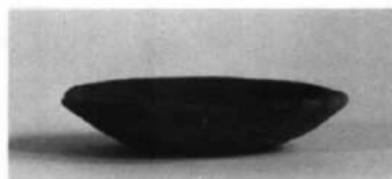
SKK 222



SKK 230



SKK 237



SKK 338



SKK 339



SKK 340



SKK 440



SKK 553



SKK 232

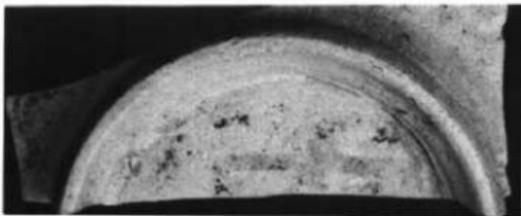
SKK 234



SKK 451



SKK 755



SKK 228



SKK 229



SKK 553



(左) SKK 342



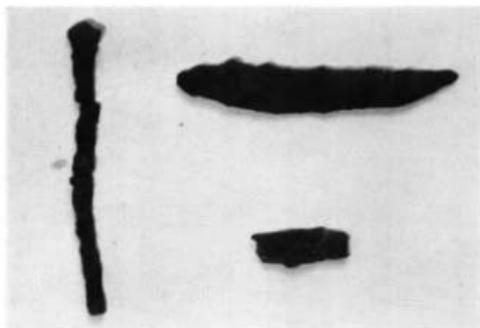
(右) SKK 105



(左) SKK 341



(右) SKK 104



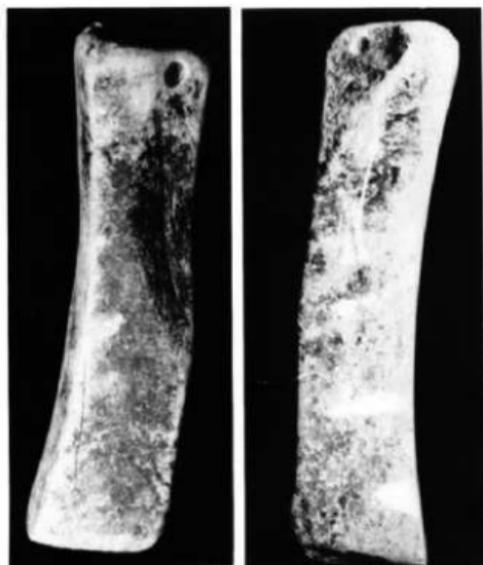
土壤25出土刀子

6住出土釘

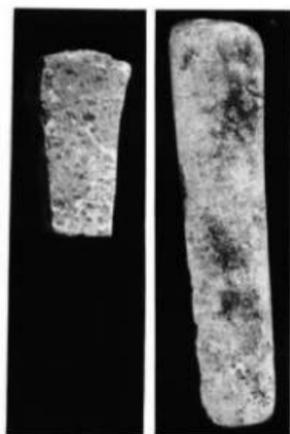
溝1出土刀子



土壤3出土木片



3住出土砥石



2住出土砥石

3住出土砥石



SKK
検出作業



SKK
1住掘下付



SKK
5住掘下付



SKK
土壌群掘下仔



SKK
記念撮影



SKK
島内小学生見学



SKK
プレハブ撤収



SKK
資材撤収



SMH
排土作業



SMH
溝掘下げ

松本市文化財調査報告No.36

松本市島内遺跡群

— 北方遺跡・南中遺跡緊急発掘調査報告書 —

昭和60年3月20日 印刷

昭和60年3月30日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 中信凸版印刷株式会社

